

演類媛

第九號 第九年

昭和九年十月廿五日
昭和九年九月廿一日
第三種郵便物
一月發行



八十一卷 白川信



オドリチナル ムーリック

ガンシニバ



なんと大膽な……
……計畫ではありませんか

發賣五週年

感謝の爲

御愛用の皆様へ

全額拂戻しの大キャンペーン!

期
月九◇月八
り限間月ケ二

- ◇お買求めのオドリチナルクリーム空函を
- ◇東京市日本橋區水天宮前
- ◇本舗安藤井筒堂景品係へお送りになれば
- ◇直に同額のオドリチナルクリームを進呈致します
- ◇拂戻後數二十萬個限り大小に不拘御一人一個限りです
- ◇全額拂戻しの大優待ですから送料及包装材料として
- ◇參錢切手四枚を右空函に添へて御部送下さい

原料香水オドリチナル本舗

株式
會社

安藤井筒堂

東京市日本橋區水天宮前

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

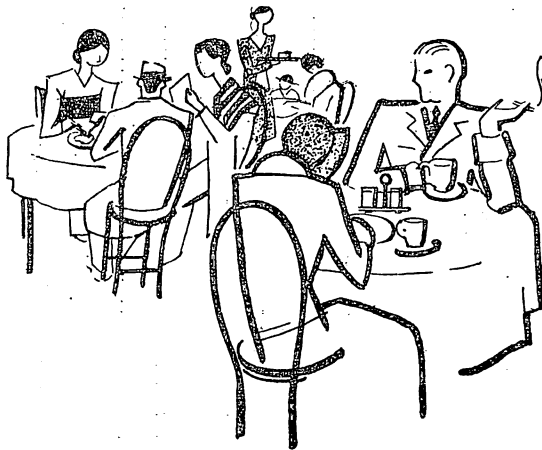
支店

大阪支店

心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町

京都支店

木屋町ドングリ橋





東側柱

◆道頓堀・昭和九年九月號・第九十六輯◆

★ 繪 口 ★

◎中座「大平記藏燈」齋藤太郎左衛門延若・妻花園福助・永井右馬頭壽美藏・三位局芝鶴「色彩間」豆「與右衛門壽美藏・かきり魁車」仇縁恨坂町「古手屋助三郎壽美藏・養子若野芝鶴・古手屋八郎兵衛延若・丹波屋お妻魁車・矢島才兵衛福助」片屋道滿大内鑑「葛の葉福助・彌助平延若・狐助平福助・與勘平市藏・悪右衛門壽美藏」一姫鏡双葉繪草紙「稚曾我・墨ぬり」白石噺「各舞臺面」◎大阪歌舞伎座「マーカス・シヨウ」◎浪花座「鐵砲勇助」三十六號室「萩と紅葉」愉快な衝突「暗の光り」各舞臺面◎角座「花咲く樹」「呼び鳥」各舞臺面◎

★ 表 紙 齋藤太郎左衛門 (中 座)

★ 扉 十吾の徳兵衛 (浪花座)

中 座 セクシヨ

身替り音頭の味 高 谷 伸 (五)

若手奨勵劇に寄す 西 尾 福 三 郎 (六)

市川壽美藏を語る 安 部 豊 (八)

御注文魁車を語る 森 ほ の ほ (一〇)

◇歌舞伎狂言解題(九月の中座) 世話垣鈍文 (三)

◇大阪芝居進行私見 入 江 來 布 (四)

◇俳 優 系 譜 紙 魚 庵 (四八)

旅の失敗談(二) 曾我廻家十吾 (一七)

珍無類借着道中 元 安 豊 (一九)

三週年を迎へて 石 河 薫 (二〇)

..... 家庭劇互選句會 (二三)



賢外集(現代語版・上)……………大橋孝一郎譯述(一四)
 お芝居の手引(壹)……………山川聽雨(三三)

秋に語る

ボタンのおはなし!……………進藤英太郎(二六)
 野球大會……………山口俊雄(三八)
 俠妓物語……………都築文男(二九)
 道頓堀の生活……………笈川武夫(三三)
 「花咲く樹」のエマに就いて……………瀧蓮子(三三)

××「東京新派」雜感……………菱田正男(三四)

××南無仙壽「力士」……………花柳章太郎(三七)

……………ホールは踊る……………花月亭九里丸(一七)
 ……劇壇春秋……………B・B・B(三八)
 ……劇場街いろは歌留多……………讀人不知(四〇)
 ……漫畫「歌舞伎座異聞」……………大槻たもつ(三八)

カツト……………桑田ひろし
 編輯後記……………村上勝(四〇)

清酒

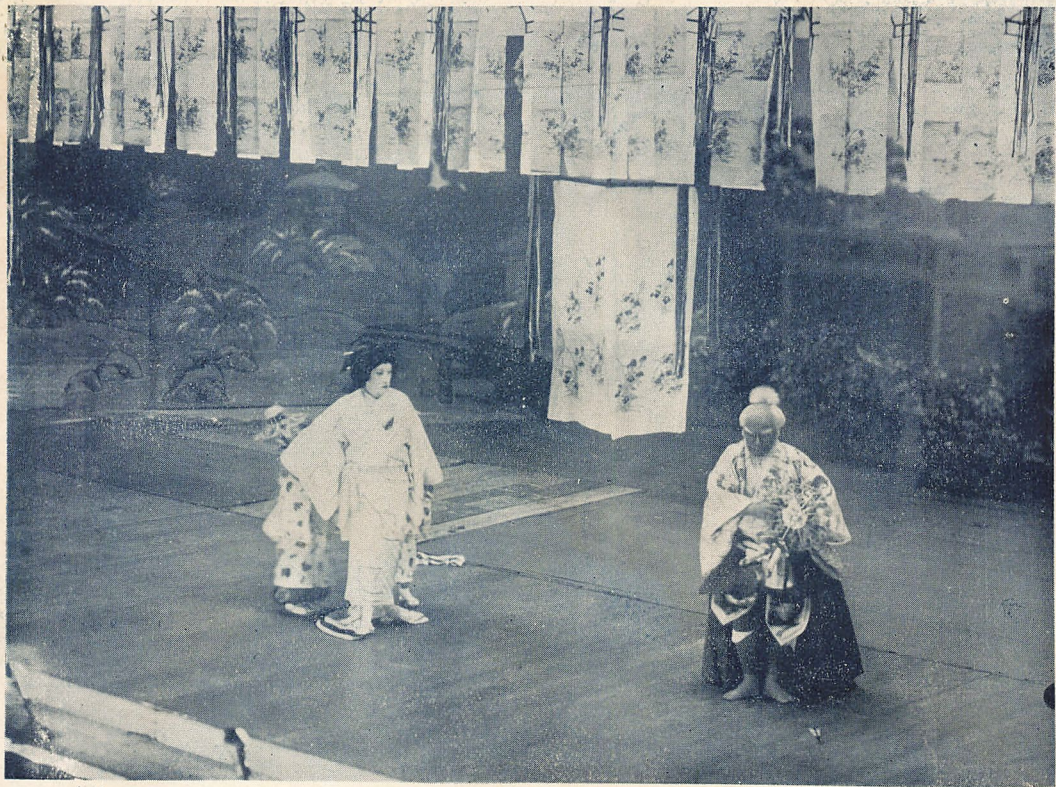
白雲
シラ
ユキ

つもる苦勞も
あの白雪の
とけてゆくよふ

よひ花

摂津伊丹灘 小西酒造株式会社





「鑑曠記平太」

若延川實

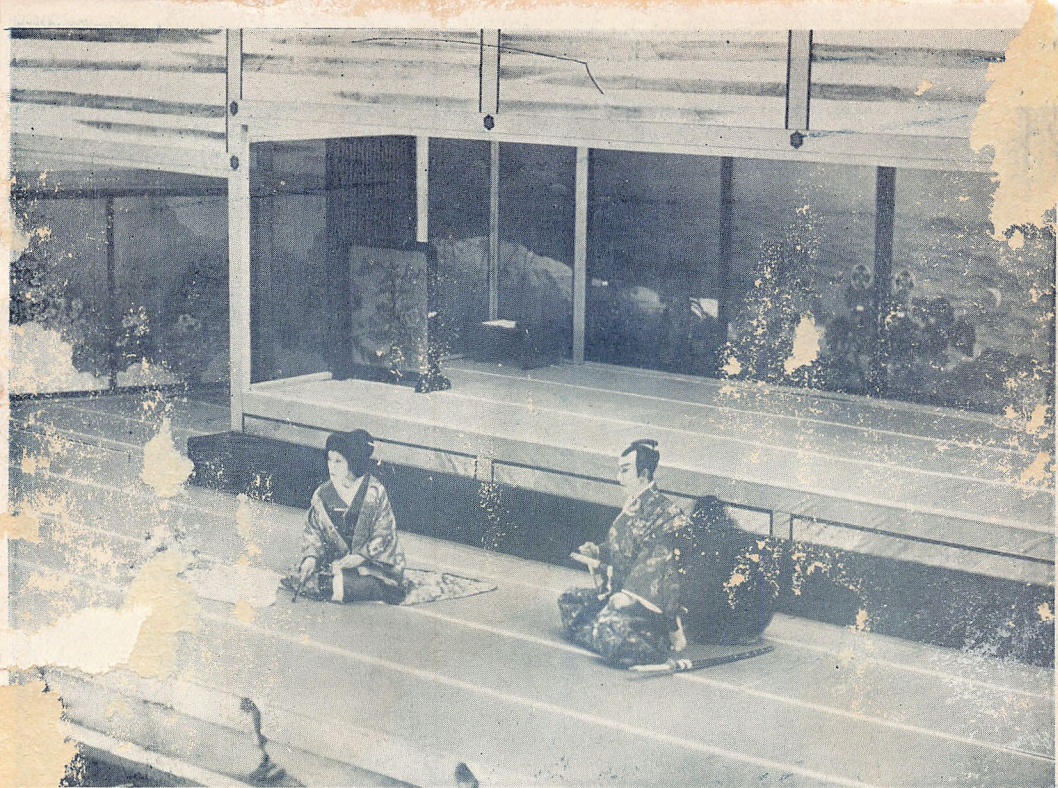
門衛左郎太藤齋

助福村中

園花妻

伎舞歌大行興り替盆

× × × 座中の月九



竹田出雲名作
二百年記念上演

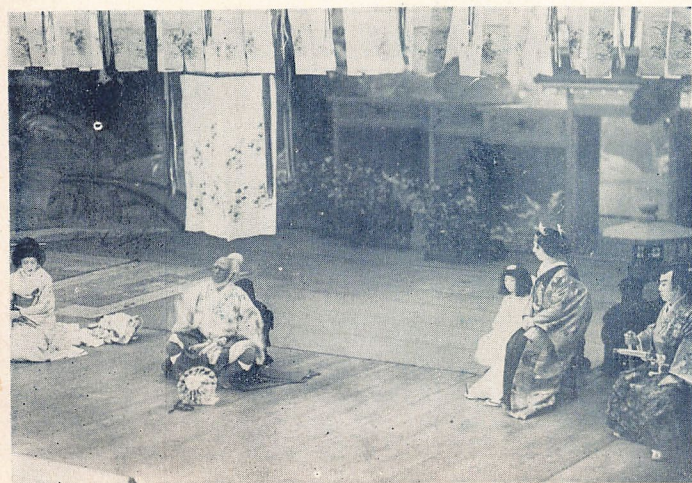
第一 太平記 曦 鎧

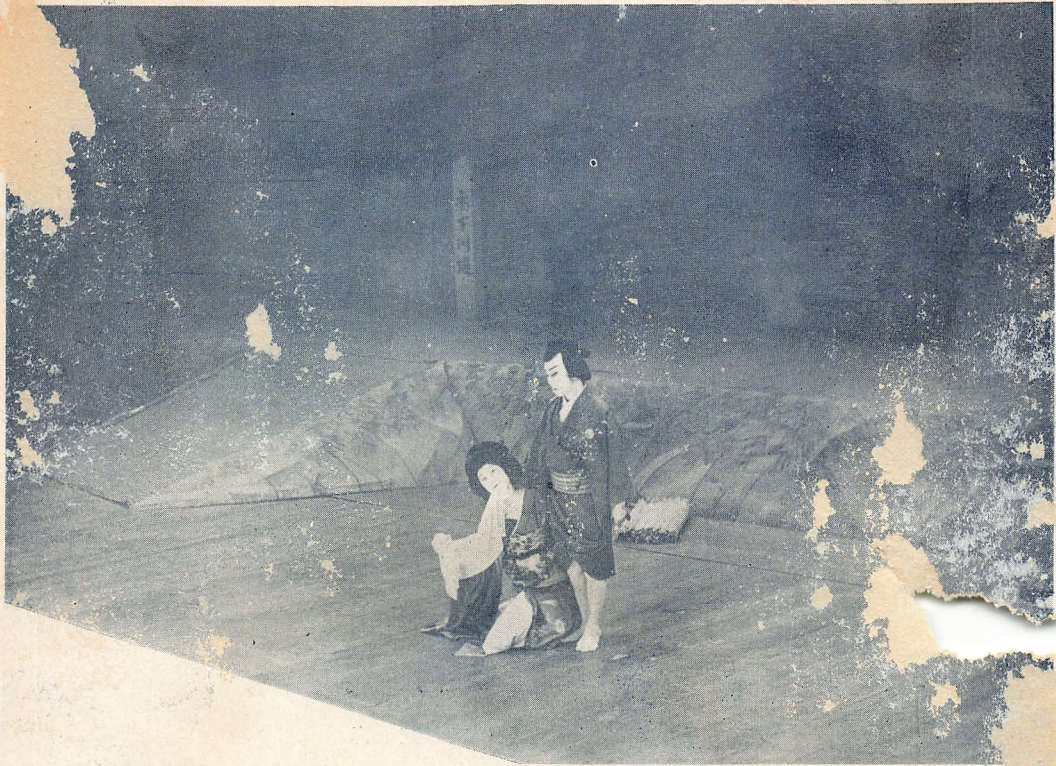
右馬頭郎より
身替り音頭まで

若君の御父君の伯者の島より戻さず給へと、永井右馬頭の妻花園が六波羅方へ使ひしたが、若君の首と引替えならばと齋藤太郎左衛門が首受取り役に罷り来る、が、彼は娘夫婦か受けた恩義に酬ゆる爲、折柄盆踊りに打ち興ずる孫力若の首を討つて若君の身替りとし、律義な老武士の切なき赤心を躍如たらしむ…

竹田出雲が三十三歳の時にものにした處女作、決定的配役にて
道頓堀久々の上場

永井右馬頭	壽美藏
妻 花園	福 助
三 位 局	芝 鶴
齋藤太郎左衛門	延 若





第二色彩間 苺豆 清元連中

舞踊と音曲の微妙な融合が醸し出す繪畫的な歌舞伎の世界こそ日本の持つ誇りではないでせうか？

女房實は奥女中かさねと小姓金五郎實は與右衛門の戀の終局、嫉妬が醸す怪奇な土橋の殺し場……

清元の名曲この一齣に顔を合すのが又東西梨園の新人です、新秋に相應しい清新な舞臺。

百姓與右衛門

市川壽美藏

女房かさね

中村魁車

大森 痴雪 作
吉川 観方 衣裳 考案

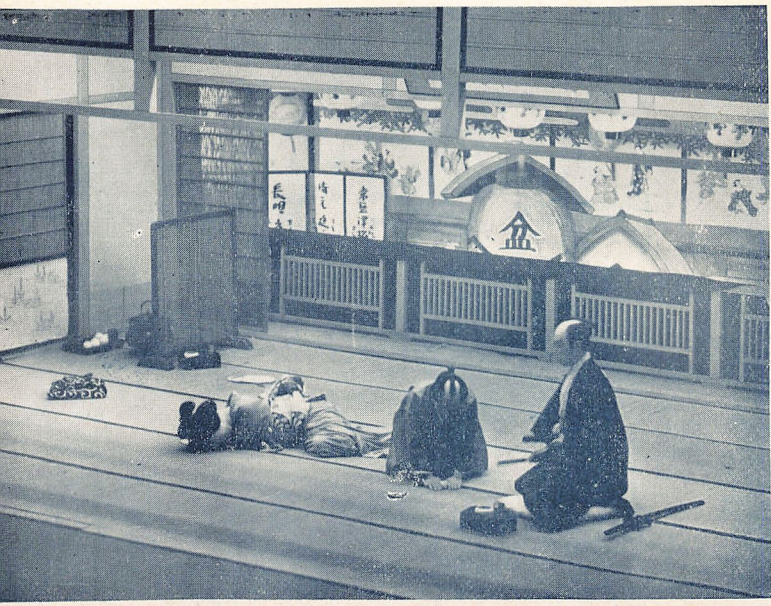
第三 八郎兵衛 おつま 仇縁恨坂町 二幕

舊主人の依頼で里見の娘お才を捜す古手屋八郎兵衛は、二世を誓つた南の藝妓おつまの助方で、同じ丹波屋の若野をお才と知つた、お才が實家再興の爲とは云へ一時でも戀人助三郎に別れればならぬ辛さを嘆く時、香具師彌兵衛の誘惑と嫉妬から助三郎の裏切りとなり、才兵衛、おつまの心盡しも水の泡、八郎兵衛は角の芝居の果て太鼓と共におつまを刺し、悲しき運命の惨虚さに呆然と立つ……
極め附の配役、快適の演出で——郷土色濃き上方歌舞伎の真髓……を展開——



古手屋助三郎 壽美藏
藝子若野 芝鶴
古手屋八郎兵衛 延若
丹波屋お妻 魁車

矢島才兵衛 福助
八郎兵衛 延若
若野 芝鶴





悪	奴	奴	奴	女
右	與	狐	彌	房
衛	勘	勘	勘	葛
門	平	平	平	の
				葉
壽	市	福	延	福
美				
藏	藏	助	若	助

第四 芦屋道満大内鑑

安倍保名の妻葛の葉は信田ノ森に住む狐であつた、或る日眞實の葛の葉姫の來訪に一子を殘して姿を消した、保名はたとへ狐たりとも六年間も連れ添うた妻を求めて野邊をさまよひ、童子は母を呼んで泣いたがどうにもならなかつた、一方悪右衛門は保名父子を殺害に及ぼんとしたが葛の葉狐等にさんざん惱まされる。

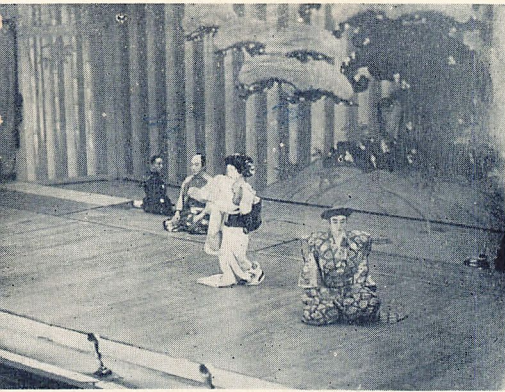
竹田出雲が晩年の傑作、恰も書き卸しより本年を以て二百年しかも當り役揃ひの大舞臺



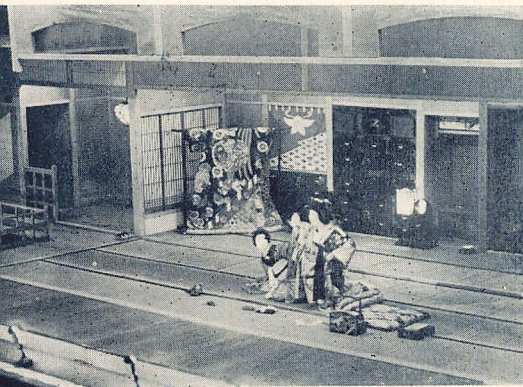
座 中 の 月 九



(2)



(3)



(4)



(1)

第 二 回 特 選 畫 間 興 行

(4) (3) (2) (1)

白 墨 稚 姫
 石 め 會 競
 嘶 り 我 雙
 紙 繪 葉
 草

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

ヨーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元

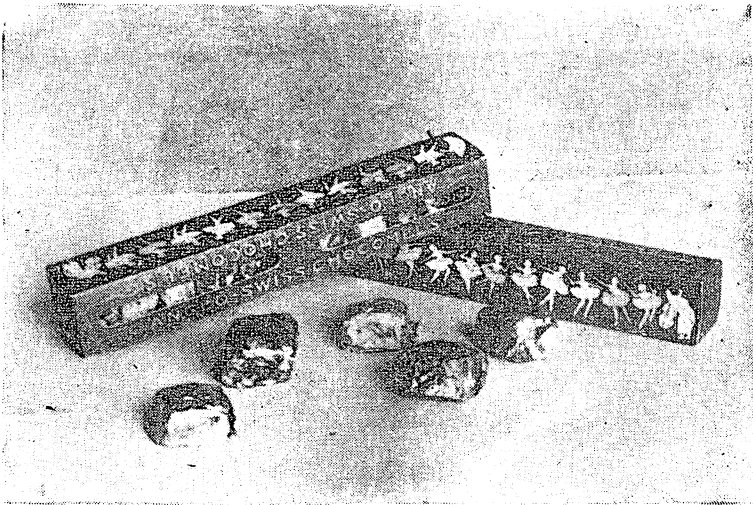
株式會社

横山商店

電話東

(94)

四二一
六〇六
四一六
九三番



便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（定價 小瓶一圓 大瓶一圓五角 拾五圓）

アポロは、一度に多量撒くことには反つて、いけません。便所の大掃除は、アポロは、不潔物から発生する悪臭を化学的變化により消臭します。従来の防臭剤（樟腦油、ナフタリン、クレゾール）等の如く、薬の臭を以て防臭するものとは異なります。又、数倍の効力があります。

凡て悪臭の場所、便所、其他大抵の場所へ毎日十滴乃至十滴撒つ、（場所の大小により多少の加減を要す）撒布すべし。但し一回に多量撒布するも却つて力効を減ずる場合あり。



使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

主治効能

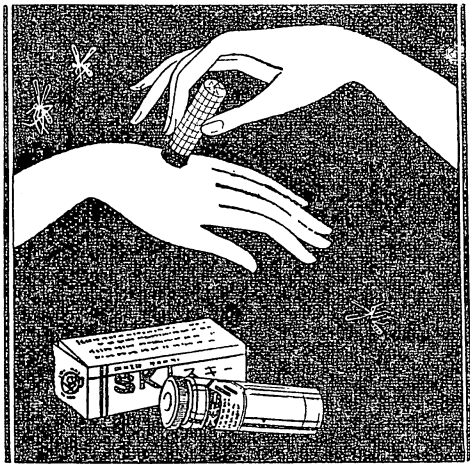
蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫等ノ襲來防禦並ニ是等虫類ノ刺傷ニヨル癢痒感痛痒感驅除

本品ヲ手足等ニ塗擦シテ置ケバ蚊、蚤其池害虫ノ襲來ヲ防ギ且ツ「カユミ」ヲ解消スル新劑ニシテ尙佳快ナル芳香ヲ有スレバ夏期ニ於ケル各御家庭ノ最モ重寶ナル常備藥ノ一トシテ是非皆縁ニ御推奨ス

スキーク

（無脂肪性）

蚊よけチツク



發賣元

電話替 本局 三三三 番五
電話替 本局 三三三 番七

光榮商會

大阪市東區 大見町三丁目



MARCUS SHOW



マ
ー
カ
ス
・
シ
ョ
ウ

ベ
ン
・
マ
ツ
カ
ー
テ
イ

エ
ル
マ
ー
・
コ
ウ
デ
イ

・ 座 伎 舞 歌 阪 大 の 月 九 ・



「ラ・ヴェイ・パリー」二部二十八景……………
 にはアクトロバチツクダンスあり、寸劇あり、曲藝あり、流行小唄が唱は
 れ、コミックブレイが演じられたるが、これを縫つて半裸體の踊り子群
 がジャズステツプも華やかに踊ります正に總てをジャズアツプしたアメ
 リカ大レヴェー



レオン・ミラー



大阪競馬大立

午前十時發馬
雨天順延

九月
二十一日 (金)
二十三日 (土)
二十四日 (日)



一九三四年
 飛躍する
 健康は
 チョコレートの
 韻律に
 乗って!

森永手製チョコレート



★ 者 驅 先 の 造 製 ト ー レ コ ヨ チ ー ル け に 本 日 ★

錢 十 錢 五



鐵砲勇助

ツドン！ ツドン！ 當ると面白い。
面白きにつける口鐵砲、反動は強く
ドシン、ソレ！ 鐵砲打ちは山を見ず



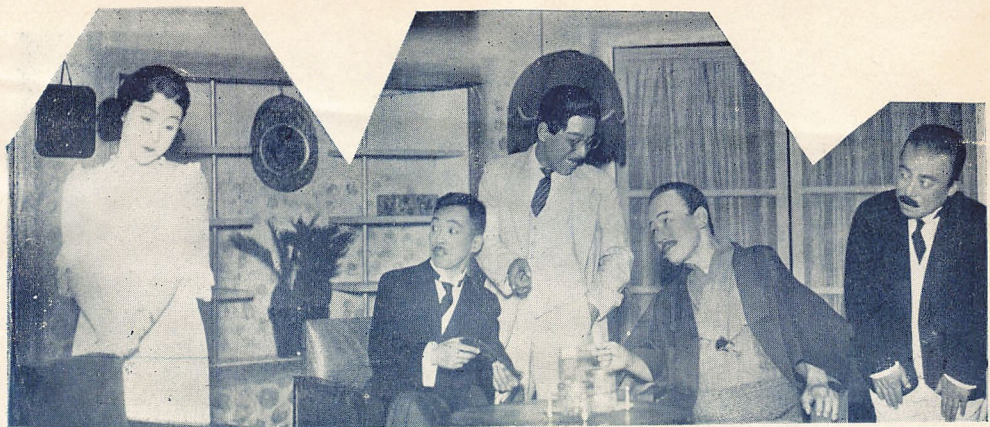
三十六號室

愛を抱く者には愛の報ひ——愛の廻り
合せがある。天地は廣うして狭い。憎
悪の心も愛の真情に敵し得ぬ愛の力は
無邊だ。



萩と紅葉

旱天に慈雨の如く、日照りに天女の雨
が降りました。それに濡れてみたい二
人のウーピー事件は軒の雨宿りから：



令 失 會 社 執
 業 社 員 長 事
 嬢 者 員 長 事

「突 衝 な 快 愉」上

石 十 天 小 通
 河 吾 外 織 天



「り 光 の 暗」下

妹 兄 河
 八 與 内
 重 太 德
 郎 兵 衛

東 天 十
 外 吾

●座 花 浪 の 月 九●

九 月 中 旬 封 切

原 脚 監 攝
作 色 影 攝

中 上 田 中
野 島 中 井

實 量 雄 一

河 淺

津 田

三 健 郎

稔 主 演
山 德 川
真 夏 代

巨 人 街

新 誕 生 了 創 作 週 三 日 會 念 眼 圖



(他無慮數百名出演)

三 條 外 子
月 瀧 子
五 十 鈴
春 路 鈴
片 桐 誠
林 東 誠
松 本 長
吉 團 泰
岡 圓 光
北 荒 德
木 岡 慶
加 戶 忍
英 勝

一 々 八 三 總 老 劇 一
月 形 龍 之 介
大 谷 日 出 美
小 金 井 勝
利 木 靜 子
毛 鈴 子
峰 澄 子

仇 討 義 怒 坂

原 脚 監 攝

作 色 影 攝

加 戶 野 恩 兒
川 石 山 常 次 郎
崎 田 民 三





裂 小・具道小
 裳 衣 貸

素人演藝會
 宴會の催物
 春秋溫習會
 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳に少多に不拘御利用
 さいます御來客の相談に應じ便利
 下さる……すまじ致ひら肝取お

松竹衣裳部

本店 大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
 電話 戎 五 六 三 四 番
 東京支店 東京市淺草區駒形町二十三番地
 電話 淺草 六 六 六 一 番

●關西新派劇九月公演

花 咲 く 樹

エ 島
マ 田
瀧 山
口



お 牧
い つ 山
と た

若 宮 山
葉 村 村

社 編 社
な 輯 編
み 員 員
子 マ 員
員

社 中
編 都
員 築
長 田
長



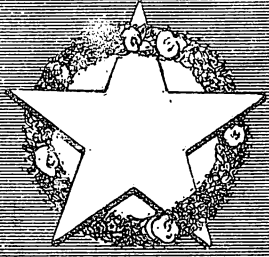


「呼子鳥」
 上總屋彌兵衛
 娘お若
 八卷傳右衛門
 春風八重柳
 伴傳二郎

進
 若中梅野
 田葉藤
 合井

井野梅……柳重八・田中……門衛右傳・畑……種人用

座角の月九



又平字屋

又平字屋
石炭

又平字屋
紙白粉

又平字屋
紙白粉

又平字屋
紙白粉

中田又平字屋

朝日堂株式会社

支店

支店

大阪

大阪

御園白粉

上品な明るい化粧美を
お望みなら……是非……



濃くも・淡くも
思ひの儘に溶け
明るい上品な色
合ひは優秀品の
第一線を確保
御園チタニユーム白粉
白・肌 各五十銭

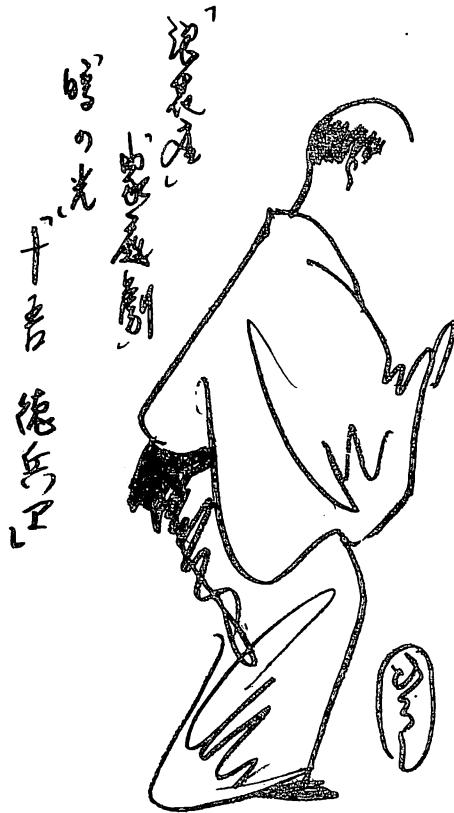
藝雅・究研劇演・刊月

九月號

演藝類編

第九年

第九十六輯



歌舞伎狂言解題

— 九月の中座 —

世話垣鈍文

■太平記曦鑑

八月の御難月も秋風の爽かな訪れのうちに過ぎ去りまして、眞に氣持の良い初秋の季節とはなりました。お芝居の方も此の月の中座は、竹田出雲二百年記念名作興行と云ふ結構なお催しで、私の解題業も、此の月は一寸お忙がしいので御座います。

は今も申す通り七月號で少しく解題を試みましたが、竹田出雲、松田和吉の合作に近松門衛左門が添削を加へました五段續きの操淨瑠璃で、享保八年二月十七日(二百二十二年前)より竹本座で上演されたのであります。切子燈籠を背景に盆踊りの趣向が取入れられております爲、夏狂言の部類に入れられて居りますが、一體に世話物揃ひの夏狂言に交つての此の鑑物は非常に珍らしい夏狂言と申さねばなりません。全五段の場面を申

とり分け七月號の夏狂言解題に御紹介しました『太平記曦鑑』の名作が、早速に上演されるなど、いさゝか小生としても氣持のいゝことゝ申さねばなりません。扱——

してみますると、初段（大序）紫宸殿の段、（中）土橋の段、（切）無禮講、つはもの萬歳、六波羅の犬高橋最後の場、二段目（口）陣太鼓、（中）勢揃へ、（切）松原合戦、三段目（口）切子の段、若宮短冊、（切）身替り音頭、四段目（道行）熊野すゞかけ、（口）義光錦旗奪還、（中）物狂、（次）兵衛館、（切）藤棚、五段目、齋藤最期の場。となつて居りますが、歌舞伎狂言として上演されて居りますのは、主として三段目で御座いまして、享保九年正月の中座が初演、京都での初演は同十一年の佐野川座、江戸では寶曆十年（百七十五年前）の森田座で御座いました。爾來「身替音頭」或は「切子音頭」として劇通家に知られ、本月の道頓堀では、實に二十八年目の上演に當ると云ふことです。此の狂言に現れて来る齋藤太郎左衛門と云ふ古老の武士は、剛骨頑強なる武士氣質を示す代表的な人物でありまして、胸中には慈悲心を抱き乍ら、表面には飽く迄大義親を滅すと云ふ態度を現す武士の理想が、最も劇的に全篇を通じて表現

されてゐるので御座います。

■芦屋道滿大内鑑

これも右と同じく竹田出雲の名作で「戀しくは……」の歌であまねく膾炙してゐる名狂言であります。信田の森のF狐と安倍保名と契つて晴明を生んだと云ふ信太妻の傳説は随分古いものでありまして、「日本靈異記」「水鏡」などの古書にも既に見えて居るので御座いますが、正保四年に刊行されました「ぼさ抄」と云ふ書物により以上詳かに記載されてゐるのです。それを題材として延寶六年に山本角太夫が淨瑠璃に仕組むだのが、戯曲に取入れられた嚆矢とされて居るので御座います。（約二百六十餘年前）次いで、宇治加賀掾の「晴明道滿行力評」や紀海音の「信太森女占」（正徳三年 竹座上演）を経て、此の竹田出雲の大内鑑に至り完成されたのであります。初演は享保十九年十月十五日よりの竹本座で御座いました。（二百〇一年前）全篇五段続きですが歌舞伎

狂言として上演されてゐるのは主として四段目の所謂葛の葉の子別れの件りで、歌舞伎の初演は寛延元年八月(百八十七年前)の角座でしたが、江戸では既に元文二年の秋(百九十八年前)中村座で上演されたことが御座いました。又、二段目の小袖物狂は後、清元の名曲「保名」深山櫻及兼樹振)を得て、所作事として立派に獨立致しまして今日でも菊五郎と延壽太夫の名コンビが神品として輝いて居るので御座います。

■ 色彩間 菊豆

「かさね」を主題としました狂言は、數十種に及んで居りました、到底限られた紙数では書き切れませんので、此處では此の所作事に就いてのみ申上げること致します。

一體、怪談物と云へば一口に氣味の悪いものと相場が定つてゐるものですが、此の舞踊化された怪談の何と云ふ美しい一幕であることでありませう。これは先づ優れた清元の名曲の効果のしから

しむる處なので御座います。

原作では、大南北の作「法懸松成田利劍」の二番目序幕に當るところであります、初演は文政六年六月十四日初日の江戸森田座で御座いました。(百二十年前)作詞は松井幸三。作曲は初代清元齋兵衛。振付は藤間大助(二代目勘十郎。太夫は初代延壽太夫。累は三代目菊五郎。與右衛門は七代目團十郎。と云ふ當時のスタツプでしたが、以來近世まで曲は傳存してゐても振りは殆ど絶えて終つてゐたのであります。

それを大正九年十二月に至り、梅幸、羽左衛門の手で復活し、東京歌舞伎座で上演したので御座いました。

斯くして、梅幸、羽左、延壽の絶對決定版の完成復活をみた譯であります。

△ 唱歌舞伎細見・日本文學辭典・名著文庫第六卷に據る。

身替り音頭の味

高谷伸



「生世話水藝最もよし」と
戯財録で唱破した並木五瓶に
限らない。夏芝居の要諦は世
話狂言にあることいふまでも
ないが、夏狂言に珍らしい時
代物として第一に指折られる
ものがある。それが「身替り
音頭」である。

身替り音頭といふのは、竹
田出雲が三十三歳の享保八年
二月に書いた「大塔宮 嘆

鑑」の三の切である。

この幕は元來夏狂言として
書かれたものではないが、舞
臺が七月の盂蘭盆であるのと
盆燈籠の齎らす季節感が、夏
の時代狂言の随一としてしま
つたのである。

「大塔宮 嘆鑑」は「太
平記 嘆鑑」と改題せられて
その後上演された竹田出雲
の出世作ではあるが、後見格
の文耕堂の補助もあれば近松
巢林子の添削を経たとも傳へ
られてゐる。

大體、太平記の筋によつて
後醍醐天皇の御雄圖の初期を
描いてゐる。大序は時代物通
有の大内で位あらそひから紅
い藤のからくり、無禮講の段
二段目が土岐藏人頼員の妻早

咲が父齋藤太郎左衛門を味方
につけやうとして失敗し、頼
員が切腹までするが、太郎左
衛門はその死に眼もくれずに
逆襲して、所謂御謀叛の機先
を制する件から、早咲の討死
に至るところである。

三段目の口が六波羅で常磐
駿河守が三位の局への横戀慕
を體よく捌かれるのを太郎左
衛門が発見し切子燈籠の前提
となるどころ、中が今度も出
る永井右馬頭宣明の館、そし
て切が身替り音頭となるので
ある。

四段目は「大塔宮 熊野すゝ
かけ」といふ太平記でも有名
な道行から村上彦四郎の錦旗
奪還、戸野の兵衛の伴狂の、
「ふぢものぐるひ」で、淨曲

作者としては、四の切の趣向
の方が得意だったかと思はれ
るやうな場面面で、吉野の櫓の
身代りを藤の棚で見せて、い
ろけを加へたやうな情景があ
る。

五段目はありきたりの結末
をつけてあるばかりだが、三
の申切だけがこの淨曲五段の
生命となつてしまつた。

太平記を扱つたものに、土
佐小掾の「大塔宮 熊野落」が
あるが、それはあまりに太平
記の原作に就きすぎてゐる。

舞臺上の創作として、若いな
がらも出雲の才能の窺はれる
「嘆鑑」に較ぶべくもない。
金藤次でも辨慶でもいとしい
子を——孫の場合がこれだ
が——手にかけて身替りにす

シヨクセ座中



る芝居はかなり多い中に、齋藤太郎左衛門利行の目立つてゐるのは、やつぱり切子燈籠の情景である。

身替りの質首は、春藤玄蕃でさへそれもとべぬといふ程のあつくるしい題材ではあるが、夏の夕暮にふさわしい切子燈籠と、いたいけな幼児の盆踊、それには季節料理の膳の前に据つたやうな一抹の清涼感がある。

今のやうに、冷房装置のできてゐない時代の劇場で観し

んだ芝居見物は、さうした目にもうつる清涼感で心の奥の涼風を誘ひだすことなどに、ふだんから修養ができてゐたのではないか。

涼しさは目からよぶことの高尙な楽しみ、そんなことが目まぐるしい現代ではおいお忘れられて行く。

若手奨励劇に 寄す

西尾福三郎

どうもこちらの若手は熱がないので張合がない。それにもちつとも勉強しやうとはしない。むつかしい役を受取つても先輩に教を乞ふやうな事は少ない。獨りで研究してやつ

てゐるのだなと思つて、ひそかに結果をみてもテンでなつて居ない。若手の皆が皆まで悉く左様だと云ふのではないが、この調子では關西劇界の將來が案じられてならない。

以上のやうな事を先日某大立者俳優が私に語つてゐた事がある。

覇氣に乏しい事、研究心の足らぬ事、とまずれば容まり返り易い事等、忌憚なく云へば事實上に近い點であらう。

若手達にしてみれば、一年中の興行を通じて役らしい役の貰へるのはごく僅かで、他はおしなべて端役許り、工夫にも研究にも餘地のあるやうな役所はごく稀だと云ふかも

知れない。役不足等をうっかり申上げやうものなら怒ち、厭なら止めておくと云はれたらそれでおしまひ、たゞ會社から宛がはれた役を唯々諸々とやつてゐる事が、この場合止むを得ざる生き方で、これ以上積極的態度に出やうとなら、自分の生活を賭して掛らなければならぬ。

敢然と進出しやうと思へば忽ち迫る生活の不安、と云つて安易に構へてゐてもこの頃では、とまずれば芝居のない月さへあり勝ちである。進むにも不安、止まるにも不安、これが若手俳優を無氣力にさせた原因である。

この場合個々の技倆や、人氣位を頼んでゐては何もなら



ぬ。マルクススぢやないが、須らく全若手が一致團結して會社へそして大衆へ働きかけなくつちや駄目だ。既成大家をノックアウトするだけの意氣をもつて、會社側を説きつけ大衆を喚起し、浪花座あたり立籠つて旗擧げ興行をやつてみては如何。若くて綺麗な上、料金は安し、藝に完成はなくとも熱があり、疲れを知らぬ精力の濃潤味があるとすれば、誰だつて興味を唆られやうぢやないか。たゞこの場

合お山の大将のみの芝居や、小一座の無人芝居は一寸困るが。
東京青年歌舞伎の有様をきくと毎に私はいつも残念でならない。
きけば今度の奨励劇も、第一回の時に大歌舞伎の前菜として準備されたものが、これだけを見て歸つてしまふ見物が餘りに多く、肝腎の本興行が成績不振になり勝ちなので會社側で躊躇されてゐたものゝ由、全く庇を貸して主屋を取られては算盤が持てる譯ではない。が一方これによつて若手の芝居が安くて面白いと云ふ實證を得た事になるのだから、愈々益々勉強して欲しいと云ひたいのである。前菜

興行から離脱して、早く獨立した本興行を持つ事を祈りた
い。
第一回の時は餘りの大人氣で見物する場所もなく、断はりを云はれた位だつたが、私は残念さよりもむしろその方が嬉しかつた。恐らく今度もきつと成功するだらう、成功を祈りたい。狂言も面白さうな物が並んでゐる。
姫鏡双葉繪草紙。これは草双紙趣味の豊かなスペクタクルだ。二幕に締められてゐるから、何の程度に筋が活かされてゐるか分らぬが、足利の天下を覆す企を持つた横山大膳の館にはお尋ね者の若君満若がある。小栗判官の許婚照手姫は横山の姪で同じく

この館に居る、所へ判官が上意を受けて大膳出仕の督促に來る。續いて細川政元が満若受取と稱して下着する。
所が満若はその時江の島參詣の途中曲者に凌はれる、續いて満若を凌つた曲者が名乗つて出る。この曲者が眞の政元で、偽政元こそ風間八郎と云ふ盜賊、之を質せば足利家の重寶勝鬨の轡を奪つた張本新田小太郎である。事顯れて八郎は妖術を使つて逃げ去るが、野望のある大膳は毒酒をもつて政元、判官、照手等も亡き者にしやうとする所を造り阿呆の俤に見破られ、とゞ子の手に掛つて殺される。
次は江の島の海で政元と八郎と判官とが村雲の劍を探り



合ふ所、次は江州の漁師浪七の家、浪七は小栗の家臣で照手姫を隠まつてゐる。浪七の女房は新田小太郎由縁の者、茲へ小太郎の風間八郎が忍んでくるが、捕手に追はれて逃去る。が運悪く照手姫が掴つてしまふので、浪七は一命を投出して、姫の捕はれてゐる船を流しやる。姫は青墓の豪家万屋に助けられ小萩と云ふ名で下働きになつてゐる。小栗判官は宗旦と改名してこの寶光院へ来る途中万屋の娘

に戀せられる。

それとも知らず万屋にお尋ねの重寶勝鬨の響があるときいて、それを見たさに方便の入智となる。がこゝで小萩の照手姫と邂逅し、万屋の後室が照手の乳母だつた事が分り後室は照手と宗旦の結婚の爲に我娘の横戀慕を遮らうとしてこれを手にかける。以上忠義の爲に我親を手にかける大膳の子と、我娘を手にかける万屋の後室を前後に照應させてゐる外、妖術、怨靈、寶物詮議、毒酒、造り阿呆と道具立てが揃ひ、大敵、端敵、二枚目、赤面、銀頭等あらゆる特異な歌舞伎相を備へた珍しい狂言である。

稚曾我は生立曾我とも云つ

て黙阿彌の活壓物、稚い兄弟を敷革に座らせる所から敷革の曾我とも云つて、畠山重忠が頼朝に曾我兄弟の助命を乞ふ條りで、重心諫言とも云へる所であらう。兄弟役者の可憐さと重忠役者の長白目が眼目で、この場の合方にキヌタと云ふ鳴物を使ふのが一寸しんみりとさせる。

白石噺は文樂でお馴染の宮城野しのぶの揚屋の場、年貢米に困つて身賣りした姉と、親の最後を姉に報告し力を併せて敵を討つ爲に、見も知らぬ土地にさ迷ひ出た田舎者の妹との不思議な巡り合ひ、絢爛な背景道具の中の素朴な田舎娘と田舎言葉、芝居の技巧としても、鏡を使つた男女

三人のたての面白さと、姉妹と鏡台のかけ言葉や、似たりや似たり花鳥蒲杜若と云つた文句は、廣く世間に知られてゐるからこれ以上の説明は無用であらう。

市川壽美藏を語る

安部 豊

二月の東京歌舞伎座で出した「金閣寺」の狩野之助直信彼の扮したその姿が私に深い印象を留めてゐる。繩付きのまゝ引かれて出て花道へ入る丈のほんの束の間、名詞もない此の一役を何故私は忘却し得ないのか——それは私の心への彼の一つの解答であつた



のだと私は今思ふ。
 彼壽美藏の俳優としての爲
 人を検討する爲には、その一
 座の主たる左團次を引合ひに
 出さねばなるまい。無器用と
 いはれ反逆者とも罵られなが
 ら遂に前人未踏の地に己れが
 生くべき領土を見出したのが
 左團次であつた。在來の歌舞
 伎劇の内容に慍らすその技巧
 の微妙繊細たる、我に適さざ
 るを知つて敢然他を索めた彼
 は岡本綺堂氏を得て堂々と新
 生し、現在にては眞山青果氏

の難解な芝居を演ずる唯一人
 とし、寂しく周圍から懸隔す
 る。歌舞伎の一部面貌を變相
 させた革命兒、その左團次の
 下に在つて彼市川壽美藏の役
 者修行は積まれたのである。
 歌舞伎味の薄さも亦是非がな
 い。
 端正な顔と姿——秀でた美
 貌とはなくとも彼も恵まれた
 方ではある。彼より若い人達
 の中には割合に過去の役者ら
 しい、佛を傳へた者が認めら
 れるが、彼と同級に屬する人
 めを見渡してみればそれも亦
 一つの心強さである。聞けば
 茶道を楽しむといふ彼はその
 形を借りて焦慮を慰め反省の
 機を得てゐるのであらう。惱
 んでゐるに相違ない、惱まな

ければならない固定した状態
 が重苦しく彼の上へ蔽ひかぶ
 さつて來てゐるのだ。彼と等
 しい立場にあると思はれる男
 女藏などには外から何の氣も
 窺はれないが、進歩的な左團
 次の膝下に、まして厳し過ぎ
 る程の生眞面目さを性格とし
 た彼がノホ、ンと澄ましてゐ
 る譯はない。左團次と俱に芝
 居をしてゐれば決して間違ひ
 ない彼である。大まかな高島
 屋の藝を要所々々で引緊めて
 ゆくやうな實にキビ／＼した
 頼もしさを見せ、理解も藝も
 隅から隅まで行届いて、眞に
 間然する處がない。併し彼の
 意圖が奈邊に存するかは知ら
 ないがこの常態に私も飽いた
 猿之助もとより、松蔦も最早

一人立ちにぐん／＼進出して
 行つてゐるのである。殊に松
 蔦の如きはめぼしい女形拂底
 の機運に迎へられたのである
 が七月は羽左衛門の相手に、
 八月には「牧の方」といふ自
 分の出し物までして意氣軒昂
 たる有様だが、それは結局松
 蔦をより以上成長させる事に
 なるであらう。恵まれた名
 地位は或る時意外な飛躍を招
 來する——彼壽美藏に對して
 も私は是非斯うした立場を興
 へたいのである。
 本郷座やその他小劇場が失
 せてしまつた今日の劇壇は、
 二三の大劇場にたゞ徒らに人
 を集めたまゝ咀嚼し切れない
 状態にある。劃一的な小學校
 教育でもある様に、俳優も上

中座クシヨシ



演脚本も看客までが一つの鑄型に嵌められたまゝ身動きがとれない。「無智」な現代の大家を「教育」する爲にも、

ましてや潑刺たる若き次代を背負つて立つ俳優自身の爲にはもつと自由に思ひ切り驕足を伸びさしてやらねばならぬ。壽美藏の如きその最にして急を要する一人であると思ふのである。

併し此間の大菩薩峠のやうなものでは致し方がない。數年前中堅連が割據して活躍し

た時にはかなり種々な出し物があつたやうだ。時代につれ流轉移動するのが歌舞伎劇の本來かは知らぬが、假初にも歌舞伎俳優たる者は、過去の優れた先人達の遺した特有の技能を何にもせよ一たび受継がない法はない。然らざれば歌舞伎は遂に亡びるのである。

壽美藏の繪師直信が何故私へ一つの答を示したかと云ふのに、左團次の影法師から全然離れた彼を見、彼の血の中に眠つてゐた歌舞伎が目を覺してあの柔しい色若衆の姿で微笑して呉れたからである。「御安心なさい。私は何だつて出来るんです」彼の眸は斯う云つた。

私も亦それを信ずる。八犬傳の網干左母次郎もさう語つた。氣分轉換をせねばならぬ。異つた他の一面を成育させて行く道さへが拓けたなら若々しい彼は又晴れ々と伸びて行かう。

御注文魁車を語る

森 ほんのほ

福助、魁車、壽三郎の鼎會の最近の仕事は六月の「近松とおさん」だつた。これは飛び離れて優秀なシバキといふ譯でもなかつたが、鼎會の存在をハッキリ知らせるに足るものでありました。壽三郎の太治兵衛（おさんの後の夫）

も素材な役柄がニンにあつたし、福助の近松翁も意外な出来で、藝術家らしいところもほの見へたし、一番難役と思はれた魁車のおさんも、どうやら相當演りこなした。併しシバキ全體から見ると、何處かに暗い寂しい陰影が投げられて原作の持つた軽い味——氣安さともいふものが薄められてゐた。そこで、その因つて來る所を考へると、それは脚本そのものでも、演出でもなく、三優それぞれの資質の反映だらうと思はれるのである。

壽三郎といふ優は、押出しも藝風も左團次系の役者だが左團次ほどの潤達さ、明朗さが無い。延若のやうな華やか



さも無い。何處か一抹の寂しさが隠されてゐる。これは決して私の氣のせいと云ひ捨ててしまふことは出来ないらしい。福助といふ優にも亦同じ事が云はれる。故人雀右衛門の玉手御前の華やかさ、明るさは、福助に求めることはむづかしい。そして、多岐多角な魁車君も、なぜか暗い影を飾ひ落すことの出来ない役者なのである。かやうに鼎會の三人が三人まで、明朗、暢達寛達の世界に跳躍し得ないの

も本當に不思議である。さて私が本誌から受けた御注文はこの鼎會の一つ——魁車を語れである。御注文は受けたもの、文屋の文句で「ぎつちり詰まつた」のである。と言ふのが、既に餘りに多く語られ過ぎてゐるからなので、と云つてこのまま引退れもしない。そこで出たとこ勝負で御免を蒙る。

今更らしく云ふがものはないが、魁車といふ優は器用な役者です。尤も延若といふ優るとも劣らぬのがあるが、まあそれはそれとして……早い話が「忠臣藏」で（これは他人様もよく云ふ例だが）演れと云はれて演りこなせぬ役は先づあるまい。が、由良之助

は……い、ま、だ……と力彌のセリフを拜借することになるだらう。と云ふのが、これは腕ばかりでは行かぬ役柄だからである。いつぞやの顔世が餘り芳しくなかつたのも同じ譯。不器用な左團次の忠彌が天下ではない。人氣を取るのもやつぱり同じ理窟だ。

併し腕のあることを確である。腹のシツカリしてること。思ひの外である。これは全く若い時分の東京での修行が物を云ふのだらう。「酒井の太鼓」の家康や「春日ノ局」の稲葉佐渡は、これ程細い心理描寫が出来るのかと思つたくらゐで、殊に前者は自分が嘗て見なかつた優秀なものであつた。が、さう褒めてばか

りゐられぬものもある。「土屋主税」の大高源吾は何となく浮いてゐて眞實性が尠かつたし、「暫」の女鯨には肝腎の愛嬌も華やかさも無かつた。後者の如きは、前にも云つたやうに、明るく朗らかになり切れぬものが此優のカラダにあるので、時に恐しく不健康とさへ感じられるのである。が、逆にその不健康さを利用することが出来ぬでも無い。例へば、猿之助が當てた「義民甚兵衛」のやうなシバナキでは、その不健康さ、暗さが、あの愚直な主人公甚兵衛を活かすに役立つであらうと考へる。それからもう一つ利用出来るものに此優の眼——強度の近視眼らしい、あの眼

ウキスデキ
キムラモツ
ベユラモン
キユラミ
ペーミ
ジバ
滋養葡萄酒

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品
國產金鶴印



元 發 賣 店
山 商 店
横 山 商 店

株式會社

大阪市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六二
二〇一三
四六四九



刊 夕

がある。師直にも、義平次にも、岩藤にも、八汐にも、相

當物を云ふあの眼がある。いや、眼ばかりではない。鉤鼻

に近い高い鼻、不唇の出る口先、それらはかうした役に

役立つのだそれらを魁車の爲に利用させたい活躍させたい。

大阪市西淀川區野里町四二六

發行所 大平新聞社

編輯兼發行印刷人 安平市太郎

本紙定價 一部金二錢

廣告料 一行十字詰 金一圓

場所指定料 一行毎ニ 三十錢増

題字
岡本綺堂
序文
石河薰

山上貞一著

定價
四角
送料
拾四圓

最新刊



今や關西劇壇を風靡しつつある松竹家庭劇の舞臺監督として令名ある著者が、劇文壇の巨匠岡本綺堂先生に師事して十五年、その間の收穫中より劇作十三篇を収録せし文學的香氣高き戯曲集。敢て新秋劈頭の讀書界に推舉して同好諸彦の御愛讀を俟つ。

本書内容

- 1、お龜女夫心中
- 2、正木獎學賞
- 3、裸武將
- 4、水茶屋の女
- 5、モデル問題
- 6、プロペラは廻る
- 7、出發前
- 8、鶴藏と鶴之助
- 9、山の殺人
- 10、日の丸の子
- 11、武士の敵
- 12、難波平野之陣
- 13、戦記宇治拾遺

山上貞一著作集 (既刊)

第一篇

山上夜雨歌集

¥一・五〇

第二篇

短篇小説集

春鶯囀

¥一・〇〇

第三篇

芝居見たまゝ

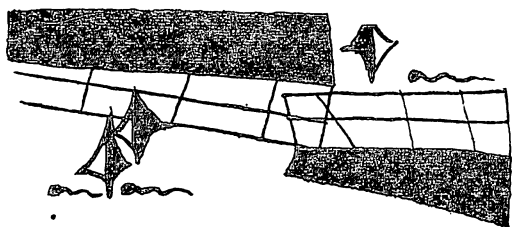
二十五番集

¥參・〇〇

婦女世界社

東京市橋區木挽町四
大坂市西區土佐堀船町

版元



大橋孝一郎 譯述

◎ (上) (版語代現) 。 。 。 集 外 賢 ◎

解題——賢外集の一巻は享保年間に其の當時の立役者染川十郎兵衛が談話を吾妻三八が記述致しました演劇書で、主として當時の京阪の名優坂田藤十郎の藝談や逸話が記録されてある元祿の上方歌舞伎の内容を知る上に於て、『耳塵集』と並んで最も貴重な文獻とされてゐるものであります。今私は拙譯ではありませんが、これを現代語に書更へまして普及の一端としたいと思ふのであります。猶書名の賢外と云ふのは十郎兵衛の法名だと云ふことです。

○
坂田藤十郎は皆様も既に御存知の通り、眞に美しい色男役の名人で、今日の鷹治郎に勝るとも劣らない程の藝達者な、而も癡り屋でありました。ある年『夕霧』の伊左衛門を勤めることになりまして、舞台で使ふ上草履をあつらへましたが、その出来上つた草履を一目見るなり、
「これは大きい。仕直して下さい。」と云ひます。草履屋は

「でもお足の寸法に合せてお作りしたのですから、そんなことはない筈で御座りまするが……」

「云ひましたが無駄です。どうしても作り替へて呉れと云ふのです。」

「ではいくら程小さく致しませう。」

「トまはり小さくして下さい。」

と云ふことになりましたが、草履が小さいので指が入らず、指に引懸けて舞台に出ました。樂屋の者が氣を付けて「草履へお足が入りませぬか。」と申してしましても、一向に平氣で舞台上つて行きます。或る人が此の事を不思議に思ひまして尋ねますと、藤十郎が答へますには、

「此の草履は揚屋の庭でぬぐことがあります。その時に草履が大きいれば見物には、藤十郎は大きな足だと笑はれるその上に傾城買の私

の役柄がこはれて終ふではありませんか。

○ 心安い祇園町のさる料理茶屋へ行き

ました藤十郎が亭主に申しまするに、

「これ程の座敷に茶之間のしつらへ

てないのはどうしたのですか。」

と問ひますと亭主恐縮しまして

「常日頃からの望みでは御座ります

るが、チト謂くが御座りまして：

……」

と云ふのを察して、早速五十兩の金子を調達してやることになりました。で

懇意の方へ手紙で五十兩の借用を申込

みました。その手紙の一句に「残らず

歩判（現在の小切手）にして頂きたい」

旨書加へてあつたのを、後日調達した

方がその理由を藤十郎に問ひますに、

藤十郎は過日の件を一通り話して後、

「袂から金子を人に遣はすのに、小判ではどうも下品に見えて面白くありません。それ故小切手にして

頂いたのです。」

と申しました。普段の振舞にも舞台の

心掛けが働いてゐるではありません

か。

○

その當時稽古と申せば何時も藤十郎の宅へ集るのがならはしでした。或る

狂言替りの稽古の時も、相手の女形水

木辰之介が山本歌門、金子吉衛門達と

同道して訪問致しまするに、至れり盡

せりの鄭重なるもてなしの上、先づ

「此の度の狂言は、中々よく出来て

居りますので私も本眞に喜んで居

ります。」

と述べ、終日御馳走をして歸されま

した。此の稽古の數日間の献立をみ

まするに、女形には、一般に女の好む料理のみを用意されたのであります。この一事に依つても、如何に女形のあしらひに氣を配られたか、想像出来るのであります。

○

又藤十郎が、高い給金で大阪の座元に抱へられました時のこと、京都より

水を樽詰めにして取寄せ、飯米を一粒

選りにして用ひたことがありました。

これを知つた周囲の人々は、

「藤十郎とは中々の奢り者だなア。」

と噂し合ひましたので、藤十郎がその

理由を述べますには、

「私が京から水を取寄せたり、米を一粒選びさせたり致して居ります

ことは、如何にも奢りに長じて

居る様ではありまするが、決して

左様では御座りません。此の度の

大阪出演は大變高い給金で抱へられて居りますので、萬一私の體に故障が出来ましては、座元を始めお客様方に、どんなに相濟まぬ御迷惑をお懸けするやも知れませぬ。米の砂を嚙合せて齒が悪くなれば、せりふが洩れて聞え憎いでせうし、土地の變つた水を飲むで胃腸をこはす様なことがあつてもなりませぬ。それ故、か様に要心して身持養生を心掛けて居るので御座ります。」

○ 山下京右衛門が、今賣出中の若手中村四郎五郎と一座しました時、京右衛門役が大評判で見物がみんなで譽めそやしました。其の夜、京右衛門が藤十郎に出合ひまして、藤十郎が評しまするに、

「私は今日の初日に見物に参りました。だが貴様はたいへん下手でしたね。」

と云ひます。京右衛門は見物の評判とは全く相違した彼の思ひがけない今の言葉に驚いて

「では、明日の二日目を見て下さい。」と云ひました。

「承知しました。」

とその夜は別れ、翌日芝居がハネてから、すぐ様樂屋へ行き、

「昨夜お約束しましたので今日も見せて頂きましたが、矢張り下手でしたね。」

と昨日にはならない挨拶です。京右衛門も大いに困りまして、その日は家にも歸らずに藤十郎の宅を訪れ、

「初日の御批難によりまして、今また工夫を重ねて勤めましたに、矢

張り貴様の御氣に入りません。此の上は、私の力では及びませんが、どうか御指南下さいませ様に……」

と願ひを入れました。藤十郎は、

「そんなら申しませう。此の度の芝居で中村四郎五郎は、今の若手中では珍らしい日の出役者です。その四郎五郎より先きに舞台に出る貴様が、あれ程芝居をして大當りを取つては、四郎五郎が仕榮えがなくて可愛そうではありませんか。もう少し、若手を導き助ける

心懸けが肝要でせう。」

と訓示を與へました。京右衛門は流石に藤十郎だと手を打つて感じ入つたと云ふことです。

——(未完)——

旅の失敗談 (2)



會我廼家 十 吾

最後は二た昔前の想ひ出で
私がまだ二十七八で旅廻りの
喜劇團を組織してゐた頃、信
州のト諏訪と云ふ温泉街で開
演した時の出来事です。

その時分から脚本を書くのが
道楽でしたので、先き乗りの
頭取が氣をさかして、私の宿
を街端れの極く静かな、寂し
い旅館に取つてくれました。
湖畔の閑静な宿、此處では書
けるわいと喜んで初日を済
まし、宿へ歸つて床に就きま

すと、隣りの室からぼそ／＼
と男女の囁く聲が聞へて來る
のです。

夫婦連れか……それとも連れ
込みの客か……、妙な事を氣
にすると思が訝へて眠られな
くなつてしまつたのです。
その内に、女の咽び泣きが洩
れて來ました。痴話？口説？
愈々お安くない仲に違ひあり
ません。私もまだ若かつたの
で、それからそれへと聯想す
ると、瘦せた體内で、青春の
血潮は不平の高鳴りをする、

幾ら寝やうと思つて眼をつむ
つても、益々眼が訝へて、眠
らるればこそ、一と晩中隣り
の室を氣にし通して、まんじ
りともせずその翌朝、ぼんや
りとした頭で、朝餉の膳に向
つた時、お給仕の女中さんに
隣りの室の事を聞きますと、

「まあーお氣づきになつたの
で御座いますか、實は私ども
でも變なお方だと思つて氣に
してゐるので御座いますよ」
と、大げさに前ぶれをして、
後は殊更に聲を落して、男の

ボールは跳る

花月亭九里丸

モウ今頃になつて甲子園の
野球大會のお話でもあるまい
が、「道頓堀」の編輯部の先
生からの御注文であるが儘、
聊か洗晒しの感なきにあらね
ど、少しは色を附けてお耳新
らしさうに申上る。

指定席券の争奪戦に見ん事
凱歌をあげて、三千圓の債券
割増金を引き當てた歡び、よ
り以上の快感（嘘云へッ！）
を味うて八月十三日の入場式
の日を待つ。
こゝで一才申添えて置きた
い事は、「一體俺の當つた指
定席券×の申168は市價？
でどの位の値打になつて居る

方は二十七八、歌舞伎役者の
ようなすつきりとした優男、
女は二十三の粹な美人で、
此處へ泊つた日から、何處へ
も遊びに出た事はなし、誰れ
一人訪ねて来る人もなし、手
紙さへ一本も来た事がないと
云ふのであつた。

「はーん、駈落者だなあ」
私の頭へは昨夜の咽び泣きか
ら、びーんと響くものがあり
ました。信州の上諏訪くんだ
りまで駈落して来た二人は、
何處の者だらう、色街の女か
それとも堅氣の娘さんか……
それが亦氣になつて机に向つ
ても、更らに書く氣は起らず
果ては若氣の好奇心から、ど
んな人達か見てやらうと、机
を踏臺に欄間の隙合から覗き

込むと、問題の男女は室内に
居ないので、凝乎と眼をすへ
て隣りの艶めかしい室内を見
廻しますと、あたりは可成り
取り亂してあり、机の上には
モルヒネの瓶がのつてゐるの
です。

駈落!!湖畔の温泉宿!!情死!!
と、まるで映畫のカットバッ
クのように、私の頭へはつば
つと、その光景が想像される
のです。私の注進で帳場の驚
ろき、直ちに警察へ……、係
官の出張、捜索隊の繰り出し
宿屋は上よ下への大騒動その
最中へ問題の男女が歸つて來
ました。

一同は啞つと云つて聲も出
ません。男女も此の騒ぎに、
呆氣に取られて「まあ何にか

あつたんですか……」と訊
る始末、其處で警官が此の男
女を取り調べますと、二人は
本當の兄妹で、兄がモヒ中毒
に罹つてゐるのを癒さうと思
つて、昨夜は妹が泣いて注射
をやめてくれと止めてゐたと
云ふのが真相、わかつて見え
ば今までの空ら騒ぎが馬鹿々
々しく、警官も氣をつけると
怒つて歸へる、その騒ぎの發
頭人は私ですから、顔を見ら
れるのも極りが悪くなつて、
こそ〜と宿を換へてしまひ
ました。



であらうか、と妙な根柢から
北濱附近や阪神梅田邊の指定
席券屋へ、ひやかしに行つて
見たくなるものです。爰で十
圓以上とでも云はれやうもの
なら、めめたゾ、と歸りには
安物のレストラントで祝杯を
擧げる不届者さへあると云ふ
話でございます。

甲子園へ行くのは、ドライ
ブなんてブル張らずに、よ
し混雑を超越した人間のソセ
ージ然たる阪神電車で行くこ
とです、なぜならば、其の乗
客が口々に云ふ一廉の野球通
を振まはす見當違ひの與太話
を聞けるからです。

甲子園の驛から球場迄約一
丁の間に風采上らぬ人相いと
物凄き怪漢が何十人何百人が



類無珍 借
中道着り 借

元 安 豊

客

家庭劇も誕生してから三年になりますねえ、何かな思ひ出と云ふやうなものはありませんか。

主人

さあ何しろ話題の持合せのすくない私の事ですから……

客

貴方は今度の三ツ目の狂言で裸題になつて涼しさうなところを見物に見せてみますが、あの肉體美？を見せられては定めし御婦人のお客さんがうろさい事でせうねえ。

主人、さあそれなんですよ、

作者と云ふものは随分思ひやりのない薄情なものと思ひますよ、何しろ私の骨體美ときたら大したもののでせう。増して夏

瘦が今一番ひどい時なんです。舞臺だけはどうかして肥つて見せたい。それを裸になつてお目にかけるなんて、とんでもない事、私のいやがるのを承知であんな役をさせるなんて全く殺生ですよ身を切られる思ひでやつてゐます。察して下さい

客

役者もまた辛いですね。

主人

裸身で思ひ出しましたが、この浪花座と云ふ劇場はよく私を裸身にしたりあります。五年前の事で

すが私が東京から第一劇場へ招かれて来て間もなく何とか云ふ狂言で裁判長の役をして舞臺で一生懸命に名判決を下してゐる間に樂屋に盜棒が這入つて自前の着類全部をやられましたね、芝居が閉

場て宿へ歸るのに着るものがない何しろ薄ら寒い時で然も雨降でしたので部屋着のタオルの寝間着一枚では歸れないのでその上に裁判長の法服を借用に及んで歸りましたが

タオルの寝間着の上に法服を着て高足駄に宿の番傘と云ふ人相見がとまど

いしたやうな格構で道頓堀を歸りましたが、いや

警察官の目を忍び、く、インチキな指定席券を賣附ける

うつかり買はうものなら飛んだ目に出喰はす事が往々ある、それを又數台の擴聲機で被害防止の警告が發せられる、その聲の出る度毎に、其れ等の怪漢が、いと口惜し氣にギョロツと目玉を剝いてその擴聲機をにらみ附けるのであります。

野球見物のファンに女性の激増した事は實際驚くばかりで、別けて花柳界の女の方が非常に多いです。さうでせう

もういつ迄もエロの話や他所行きの話でもない、矢張りお客に野球のファンが多いから従つてそれに合槌を打つが爲

あんな弱つた事はありま
 せんでしたよ、悪い事は
 三度とやら、この次ぎは
 裸身にされて、どんな目
 に會ふのかと今から警戒
 してゐます。



石川 薫

三週年来て迎へて

雲のたたずまひ

あさ晩の冷え——

長い間の暑さかり、ぬけ出
 て爽快な秋の氣が、ひたく
 と身に迫る心よさ!!

甦へつた氣がいたします。
 この季、更生しました家庭

劇が第一一回開演しました浪花
 座へ戻りまして、三週年記念
 興行を致します事は、何んと
 いふ思ひ出の深いことで御座
 いませう。なつかしい事で御
 座いませう。

生みの親——
 育ての親——

その親のふところに抱かれ
 ますなつかしさ！嬉しさ！

本當に今更のやうに月日の
 流れの早さが思はれます。い
 つも皆様方から可愛がつて頂
 だしまして、三週年記念興行
 を致します喜びの御禮は、何
 と申上げまして宜しいやら！

久々にふる里へ歸りました
 氣持は、自つと晴やかで御座
 います。何の屈托もなく、伸

々といたします。

どうぞ、この上とも賑々しく
 お引立下さいますやう、念

じ上げるばかりで御座います。

秋晴れの小旗賑はし芝居町

ケンネン号



萬人愛好の 撰真車
 國産品中の完璧 是非御愛用を

京都市三條通小橋西

株式会社 大澤商會

市内特約店ニアリ

(十九頁より)

め、「藤村が巧い、梅崎がど
うの」とやつた方が矢張營業
政策上、利口なやり方ですか
ら、中には全然ルールも解ら
ないで日參して居る賢明な藝
妓ハンもある。

それが一様に、ひつくゝり
の束髪で、衣裳でも極く地味
なもので、一見八九十圓階級
のサラリー屋さんの新妻でな
恰好で来て居ります。

現に享榮商業と島田商業の試
合の時の如き、……確か北陽
の藝妓ハンでせう、ゲームセ
ットで

「わて、名古屋の方が今日え
ゝ(享榮)と思ふてましたぜ」
「そやさかい、わても島田を
潰して來たのやし。」

成程 理屈はありますな、

吳港と桐生の試合で桐生が
やられた、桐一ちよ囁んで吳
港の手が揃ふた……併しこれ
は餘り大きな聲では云へない
こと。

市岡が台北と戦つて3對2
享榮と戦つて1對0、點にあ
らきが無い一をかりドせな
い、それが准優勝で打者はゴ
ロが多かつた、道理で熊本に
一ころで敗けたのぢやないで
すか。

入場式を飛行機から見た事
があります、昨年の春に大毎
の選抜野球大會に大藏飛行士
の操縦で乗せて貰ひましたが
案外詰らなかつたです、これ
は地上で見ると限る。大藏さ
んに對して濟まない事ですけ
どね。

繁華街に近く……交通至便

閑雅な和、洋室!

モダン階上浴室新設

南地ホテル

電南
四四
四一
一一

一 宿 一
二 圓 半
三 圓
額 半 愁

前停橋戎地新波難海南

家庭劇互選句會

我句會は第十回目、十回目を記念句會としてゐます。記念句會には高點者三名迄、賞品を贈りその他は記念品を全部贈ります。

記念句會の第四目を迎へて會員全部は素晴らしい意氣込みでしたが結局、今度も第一回から引續き同一人に最高點を占められました。

第四十回記念句會

八月九日 南座にて

夏深し(會員名一字結び)

河鹿、寢冷

直 志

廢園に丈なす草や夏深し

庭近く逃げし河鹿の鳴音哉

折 鶴

校庭に草刈る子等や夏深し

山宿のせんじ薬や寢冷人

月 更

なほ茂る雑草刈るや夏深し

園 子

枇杷葉湯の聲も夜更けて夏深し

いつに似ずおとなしき兒の寢冷哉

水遊び又吐られし寢冷の兒

郷 子

垣外のつる草たるし夏の果

温泉の町の漸くなれて夏深し

暮せまる川瀬に聞きし河鹿哉

寢冷して鏡に青き顔を見る

糸 子

河鹿鳴く瀬音高まり山暮る、

初奉公寢冷に母を偲びけり

月 宿

打直し綿とゞきけり夏の果

町びとの帽子も古りて夏深し

河鹿聞いて寂びある小石拾ひけり

ふと目ざめ寢冷恐れて戸閉しけり

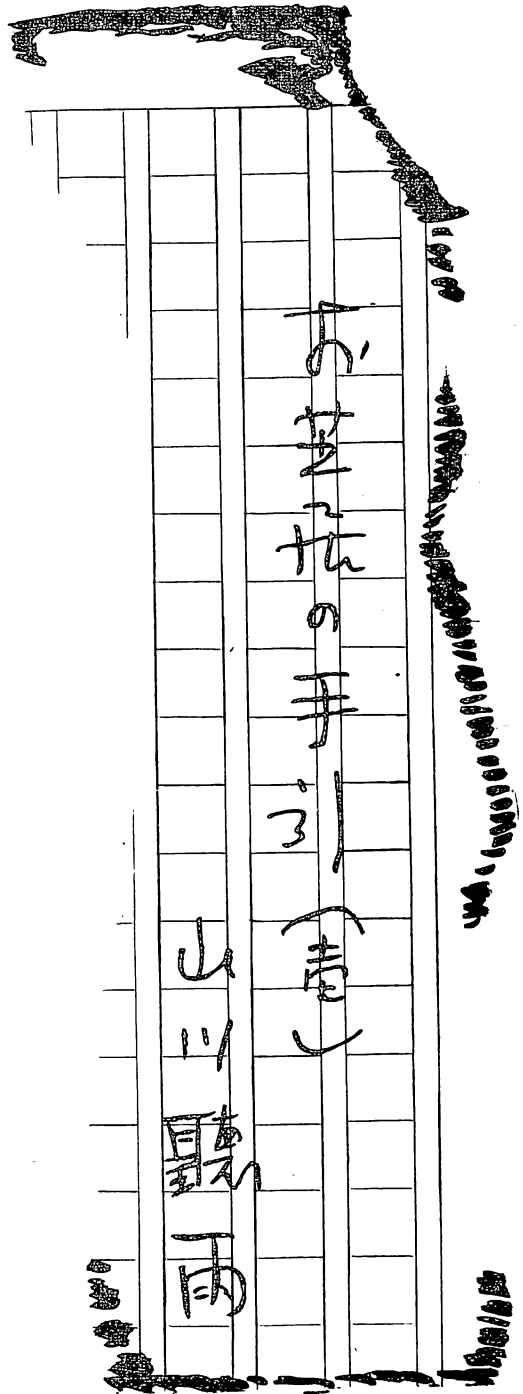
磨

山宿に寢ころびて聞く河鹿哉

めづる

寄宿舎へ戻る日近く夏深し

鉢に飼ふ河鹿に座敷静まれる



(イ) 役柄の話

◎立役——立役とは元來女形を除いた總ての男役の名稱であり

ましたが、何時のまにか實事師と呼んで、荒事、實事、和事等が含まれる様になりました。尤も總て善人に限つて居るのであります。

△荒事……とは「國性爺」の和藤内や、「車曳」の梅王、又

歌舞伎十八番の諸作に現れるものです。

△實事……は再びこれを、捌役、辛抱役、和實と分類するこ

とが出来ます。捌役とは「琴責」の重忠、辛抱役とは「千兩轍」の稻川、和實とは「信仰記」の小田春永の如き役を指して云ふのであります。

△和事……も二ツに細別が出来ます。「廓文章」の伊左衛門「新薄雪」の園部左衛門の如きを濡事師、「油屋」の福岡貢、鴈治郎の十八番物「紙治」などの役を、ハトコナと稱します。此の名稱は大坂から起つた名稱で、和事師が一等

強みを持つた役の場合に通用するのであります。

◎敵役——昔は悪人形と唱へて敵役の名稱はありませんでした。が、元祿以後から此の名稱が現れる様になりました。

△實悪……一名立敵と云ひます。謀叛人、似勅使の類で、「千代萩」の仁木、「安達」の貞任如き役を云ひます。

△色悪……一名公家悪と云つて「暫」くの受、「車曳」の時平の類です。

△實敵……一名二枚目敵と云ひます。

△平敵……實悪に似て居りますが、凄味に欠けて居るものです。例へば「寺小屋」の玄蕃、「封切」の八右衛門等を擧

げることが出来ます。

△端敵……立敵の下を働く役で、「金閨寺」の鬼藤太の類です。

△千代敵……番頭なぞの敵役で「法界坊」の長九郎の類です。

△半逆敵……一名チヤリ敵と云はれるもので、「忠臣藏」の伴内等代表的なものでせう。

◎親父方——文字通り老人に扮する諸役で、「平假名」の権四郎や「野崎」の久作の如きを云ひます。

◎道化方——通例三枚目と呼ばれるもので、舞臺に滑稽な情景

を添へる諸役を指します。例へば、「寺小屋」の涎くりと

か、「玄治店」の藤八など擧げることが出来ませう。

◎花車形——老年の女形役を云ひます。「鏡山」の岩藤とか、「中將姫」の照日前などがそうです。

◎若女形——普通の女形を總稱して云つたもので、分類します。

と左の通りに分たれます。

△傾城……「助六」の揚卷、「廓文章」の夕霧

△藝者……「五大力」の小萬、「堀川」のお俊

△姫……「三代記」の時姫、「信仰記」の雪姫。

△娘形……「千本櫻」のお里、「質屋」のお染。

△女房……「吃又」のお徳、「千兩轎」のおとは。

△女武道……「妹背山」の貞香、「千代萩」の政岡。

◎若衆方——初代市川門之助、初代佐野川市松は若衆方の名優として斯界に知られて居りますが、若衆歌舞伎が禁制とな

りまして、野郎歌舞伎になりましたから、若衆方は殆ど

女形が兼ねる様になつたので御座います。役例として

は、「忠臣藏」の力彌、「血達摩」の數馬等を擧げること

が出来ます。

◎子役——子役の内でも「千代萩」の千松や「鼠小紋」の蜷賣

り等は中々の大役で、立派な子役がやれば、大人が喰はれて終ふのは事實です。それ程子役の位置も大切なものです。

◎加役——これは獨立した役柄でもありませんが、次いでに書き加へました。加役とは、立役で女形になつたり、敵役で親父役になつたりすることで、明和三年市村座で忠臣蔵を上演しました時、初世尾上菊五郎が立役から、戸名瀬の役をも勤めたのが加役の最初だとされて居ります。

(口) 化粧の話

以上で役柄の一通りを説明致しました。次いで化粧の話です。芝居にはその役柄役柄に應じて、一種定つた化粧の型があるのです。然し何しろ傳統的な芝居のことですから普通一般に知られてゐる化粧法以外に、その家柄特有の化粧法が口傳として傳つて居りまして、中々外部の人々の計り知ることを出来ない故人名人の苦心が舞臺面に現れて居るので御座いますが、小生も勿論そこ慮及ぶべくもありませんから、極く簡単に申し上げます。

△立役——襟白粉を薄くして、顔に砥の粉と白粉を交ぜる。

△敵役——立役と同じですが、砥の粉の濃淡の違ひと、紅墨で

口を割り、目張りをグツと入れます。

△女形——襟は顔より二倍の白さに化粧して目の端を生燕脂で

ボかし、

姫は……眉毛の下へ紅を敷して後油墨で眉毛を引く

女房は……眉には生墨を用ふのであります

△隈取

二本隈……鉤形から初め、左右の目張りへかけて二本のし

かみを入れ鼻から頬へ隈取りして、小鼻と口を割つて、

頤を最後に隈取ります。

一本隈……鉤形、しかみなく、頬と頤の隈取りを省いたもの。

むきみ……對面の五郎の隈取で、小鼻も割らず、口だけを

割つて、目張りを強くしたものの。

その他數十種の隈取りは、又稿を改めて申し上げます。

右化粧の材料の内、油紅とは、隈取に使ふもので紅と朱を

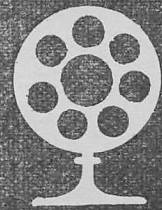
交ぜ合して油で練つたもの。又、油墨とは上等の磨り墨へ灰墨

を交ぜ合せ生蠟と水油で製らへ眉毛を引くのに使ふのであります。

(此の項終り)



秋に語る × × 次第不同



ボタンのおはなし!

進藤英太郎

ラストも迫つてのバンドは馬鹿に景気が良い。曲は彼の最も得意とするタング。音楽に乗つて彼は陶然と、スロー〜クイック〜スロー、をやつてゐる。相手はといへば一見十八九歳に

見える彼女である。オヤ〜何といふ不謹慎な事だ。彼は彼女の耳元で密語してゐる。彼「君家、何處？」彼女「FSよ」彼「ア、そう、ぢあ道だから歸りは僕の車に乗つてつたら如何」彼女「有難う。でも私達遅くなるんですもの」彼「ラストから未だ何か仕事があるの？」彼女「否」。ラストになつたら直ぐ身仕度くして歸りますの」彼「ぢあ直ぐぢあないか、送つて上げるよ。でも一緒に車に乗る處見られたら悪いんだらう」彼女「エ、」彼「何處で待つてゐよう」彼女「そうねえ、國道の右側をブラ〜歩いてゐて下さらな

い」彼「O.K」三分間は短か過ぎると云つた面持ちで彼はチツケツトを握らして席へ戻つた。

「君、ルーム消して呉れない？」彼は車の中で警察官みたいな質問を試みた。彼女は中國屈指の都會の女學校を出ると直ぐ大阪の某保險會社の外務員をしてゐる兄を頼つて上阪して今は兄妹二人でFS邊のアパート住をしてホールへ通つてゐるのだ想な。兄は社用で兎角不在勝との事。放埒らしい兄は此可憐な妹に相當苦勞をさせてゐるらしい様子、今宵も又兄は不在の事迄聞かされた。随分不遠慮な質問ではあつたが

臆する處もなく彼女はパーズンである事を自身で保証してゐるから、是も萬々間違ひ有るまい。彼は途端に決心した。「孤獨に似た此氣の毒な女性、而もパーズンと聞いては責任重、且つ大なり」斷然彼女のアパート迄護送する事を……

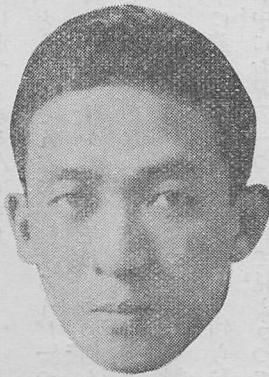
FS街の踏切りを越して車を捨て通りで「サンドウキツチ」を持たせて彼女のアパートへ着いた。

彼「兄さんが不在勝ちでは淋しいだらうねえ？」彼女「エ、。私今になつて後悔してますの。こんなだつたら兄と別々に生活してゐる方が良かったと思つてますわ……デモ、兄はそれは八釜しいんですもの。自分はとても放縱な癖に私を束縛して一寸も自由を興えて呉れないんですもの」彼「それは當然さ、兄の立場として……然し僕が御邪魔した事でも兄さんに知れたら吐ら

れはしない」彼女「それは大丈夫よ。兄さんは明後日あたりでなきあ歸らなしいし、アパートは人の出入りが劇しいし、それに中の人達餘り口を利きませんから……」彼はスツカリ尻を落ちつけて了つた。彼女も服を解いて寛いだ態度で話はそれからそれと「シンミリ」續いた。

——此間約二十分經過——

ギーツと氣持の悪いブレイキの響が窓の下にすると、扉の音と共に女給らしい二三人の聲で「ワーさん左様なら」と聞へた。瞬間彼女の顔色が變つた。泣き聲を含んで「濟みませんが……兄さんが歸つたらしいの……トテモ家の兄さん、八釜しいんですもの……」彼女は矢も楯もたまらぬ様に「歸つて下さい」と云ひ淀んでる。そう云はれてみると彼も恐ろしい様な氣がして狼狽して室から出た。廊下の降り口の處



で、兄さんらしい男と擦れ違つた。帽子越しに覗いた顔は確に見覚えがある。男も不審そうな面持ちだつたが降りかけた彼に振り返つて一瞥した。「ハテナ」考へ乍ら通りへ出て五六間も歩いてから、「ア、そうだ彼の男だ。幾度もホールで見た彼の男だ。アレがお兄さんか。フーン」彼は嘲笑する様に鼻から呼吸を吐き出した。其時、全く其時、見知らぬ人が出し抜けに「君！」と指さした。其方へ眼を移した彼はグツト詰つて聲も出ぬ。嗚呼、何たる事ぞ「オボタンが」……

野球大會 山口俊雄

毎年甲子園の中等學校野球大會が始まる頃になると私はもうジツトして居られなくなるんです。

山に、海に、避暑を試みる人達をよそに私は無意識の内に甲子園球場に惹きつけられてしまふんです。

夏の甲子園野球見物、これも亦一つの男性的な又積極的な一銷夏法と申せないでせうか。それや涼しい山の中へ逃げだすのも結構ですが、あの暑さの中で野球の熱に感激してゐると暑さなんか全くすつ飛んでしまひます。

今年も私は早々、朝日新聞社の係りへ百枚餘りの申込みの葉書を出したのですが、合憎、梨のつぶてと云ふ奴なんです。悲觀しましたね。その内毎日日を加へる毎に新聞はジャン／＼書き立てる。私はもう耐らなくなりまし

た。丁度、其頃なんです。或る御親切な方が有りまして、入場券を中元代りに下さつたんです。

私はすつかり朗かになりました。

あの「カーン」と云ふヒツトの時の胸のすく球の響が耳に聞えて来る様な氣さへするぢやありませんか。

御陰で今年も八日間あの昂奮の渦に巻きこまれて大分陽にも黒く焼けましたよ。

第五日目か六日目の時でした。連日の昂奮につひ思ひの外疲勞して少し寝過しましたね、さああわてましたよ、洗顔中も嘔鳴りました「しまつた」「後れるぞ」「遅い」と、まるでお恥しい話ながら通學に後れたと駄々をこねる坊ちやんさながらつていたらくな

んです。嘔吐つて握らせたお握りの熱い熱い奴を、ふう／＼吹きながら朝御飯の代りにするといふ有様心は遠く球

場に走つてゐるんですよ。

「どうしてそんなに熱狂するんだ」つてお尋ねですか。そりやね。あの何んとも申し様のない感激ですよ、皆様だつて、お芝居を御覽になつて居て、劇中に惹きこまれ感激なさると、知らない中にお聲の一つも掛けて見ようつて御氣持になられるでせう。要するに感激です。

沸き起る場内の歡聲。アナウンサーの所謂、欣喜亂舞つて奴。殊にホームランでも出て、満場總立ちてなことになるかと耐りませぬね。それにフアインプレーの時の敵、味方とも我を忘れてする拍手の氣持の好き。

兎に角あの熱狂の甲子園、あそこには老ひも若きも、女も男も、總て一つの氣持に溶け込んでしまふ素晴しさなんです。

私もこれで、劇團チームを率ひて

ゐる勇ましきで、時には二十五對二十八、なんて云ふ實に賑やかな勝ちをして有頂天になつてゐる加減でせうか。野球見物に熱狂して來ると、つひ前に乗り出して、一つ、ピンチヒッターにでも出てホームランでもカツト飛してやらうかと思ふんですが、ハツハ、それからあの中等學校野球につきものゝあの純真さと、熱、それが又限りなく尊いと思ふんです。

負けたチームは勿論、勝つたチームさへ無邪氣に泣いてゐるとつひこちらも無邪氣になり童心に立ち返らされま

す。
いまだに私に忘れられないのは昨年の中京と明石の二十五回戦の光景です。壯絶と申さうか、悲愴と申さうか。兩軍力を盡して、もうヘトヘトになつてベストを盡してゐる有様、私は心がふさいで見ると忍びずとも座に居耐ら

なくなつて辛じて逃げ出してしまつたのです。最後の優勝式、閉會式が私に一抹の寂寥味を覺へさせるは、そも何の所以でありませうか。



◆ 俠妓物語 ◆

都築文男

川竹の浮名をながす鳥さへも
つがひはなれぬおし鳥の

なかに立月すごとくと

わかれのつらさにそでしぼる

ほんにしん氣な事ぢやいな。

大正初期の好況の波に乗つて一躍道

頓堀劇界を風靡した山長(山崎長之輔)の影に潜む、縁の下に似た努力に報いられる事なくして紅燈の花街から、その容姿を没した有名な俠妓の挿話であるが、自分は此れを發表するに當り、南地花街の一名物として廓のあきがきにその嬌名を見る事が出来ないのを衷心から惜まれてならない。

雨に濡れて乾き切らぬ頓堀のネオンに彩られた舗道を、上空から睥睨する角座の檣の下に、尸襟の紋附も亂れて、二名の男に兩肩を支へられ乍ら、裾模様を泥濘に引摺つて足許もしどろもどろに熟酔した藝者が、繪看板に向つてろれつ、の廻らない舌で、盛に何事かわめいてゐた。

獵奇を追ふ道頓堀人には、なまめかしくも物珍らしい此の場面に、忽ち道頓堀狭しと集ひ寄つた。

腕を支へた男達は、テい臭そうに、女

を急ぎ立て、やがて群集を縫つて西へ去つた。

彼等は通行の激しい好奇の眼に追はれ乍ら戎橋を南へ外れて、演舞場の裏通り、やかな吉川と云ふ席貸しの中へ吸ひこまれた。

藝妓は當時賣れ妓でその艶麗を謳はれた大和屋のへてからの通稱を持つ若久、男は東都伊井門下を離れて西下、連鎖劇で賣川中の山長とその男衆某たつた。

而し山長を歓迎して呉れた觀衆の大部分は劇に理屈を持たない下級なファンだつた。

× ×

一夜、山長は誘はるゝ儘に大和屋に遊んだことがある。その席上彼は若久を見込んで恥も外聞も忍んで頭を垂れて、自分の後援を依頼した。

そして山長晴れの總見の日、棧敷に若久の肝煎、でスラリと並んだ南地の白切符連で、小屋も席がすばかりの盛況だつた。

披露目も浅い若い藝妓が××とか××大盡とかの肩入れで一躍花柳界の人氣者になつた例がある如く、人氣の無い役者が、一流藝妓の後援で劇界の寵兒となつた例も屢々耳にする、幸運兒そは山長である。

長唄の文句に(張りと意氣地の吉原)と云ふのがあるが、南地の若久にも負けず嫌ひの血が漲つてゐたのである。

話は以前に戻るが若久と山長の吉川席事件、これを都下各新聞は絶好のトピツクとして見逸す筈はなかつた。

役者との艶種も二三ではなく、極道藝者として或方面では随分惡名を賣つ

てゐる彼女である。

こんな譯で無論裕福な彼女ではない、だが或時有名な役者の男衆が組見の金を悪遊びに費消して、逃亡するより他に立瀬が無い程困つた事がある。それを耳にした若久は座敷に出る衣類迄質入れしてその金を拵らへて救つてやつた事を自分は知つてゐる。

若久の人間味はこれによつて充分窺へるが、或人は彼女を非難し、或は嗤ふかも知れぬ、だが昭和の現在、南地五花街を通じて、果して若久の如き俠氣のある藝者の存在は、甚だ疑問である。

現在、彼女は何處に安住の地を求めてゐることやら？……

恐らく地下に永眠する山長の靈も永劫若久を守護する事だらう、自分も彼女の幸福を祈つて此の筆を擱く。



道頓堀の生活

箕川 武夫

一體道頓堀とは、正確には何處を指して云ふのでせう。試みに二三の大阪の人に聞いてみました。が誰も判つきりとは識りませんでした。大方我橋のたもとの交番から、日本橋筋の交番に至る、つまり青い灯赤い灯の最も盛んな間を、道頓堀よ、と云ふのだらう。とは私の當推量。

さて、道頓堀には、芝居あり、キネマあり、カフェあり、喫茶店あり、川向ふには宗右衛門町を控へ、後ろに

は芝居裏を備へ、料理や、飲みや、スタンドバー、曰く何々と軒を並べて、大小軽重を問はず、凡そ人間が快樂を貪る要素でないものはないと云ふ誠に結構な處です。

唯小々どうかと思ふのは、道頓堀の川を流れるあの名にし負ふ濁流でせう。川と云ふものは、泥溝が集つて出来たのだと云ふ事を、此處へ来て始めて識りました。而も其の大泥溝で、水瓜やバナ、の皮を分け乍ら、メタン瓦斯の鼻をつくの物をとせず、ポートを漕いでゐる大阪の人の勇氣には沁々感心させられますが。

友人のA君が、どうも大阪の空氣は酸素が少くない、と口癖のやうに云ひますが、これはあながち大阪はえげつないと云ふ洒落ばかりではなく、本當に大阪の人は普段から窒素の多い空氣で、肺臓が鍛えられてゐるのかも知れませ

ん。尤も夫で貸ボートやさんも商賣にないので、實際何が幸せになるか判りません。

道頓堀の珍風景、と云つても、歌舞伎座の横手で、朝日を身體一杯に浴びて、歌舞伎座なんか糞を喰へど、大童になつて寝てゐる女連食の事ではありません。着流しにペチャンコな下駄をはいたおつきさんや、アツパツバのおばさんが、赤ん坊を背負つて、洋傘をさして、新聞紙の切れ端を振り廻して、「朝日座辨天座どうです」と呼んでるのですが、未だ一度も人が買つてののを見た事がないのですが、あれでも商賣になるのでせうか。お氣の毒に。

道頓堀で、何が耐らないと云つて、皆様も多方御存知でせう。いづもやの前の何とか云ふ本屋の店頭で、メガホンを持つたお嬢さんが、肩から赤い襷をかけてどなつてゐるあの聲ですが、

あの「可愛さうなのはこの子でござい、」と云ふ聲を聞くと、氣の弱い私等は、どうも工合が悪いのです。あれ等も、元はと云へばマネキン、ガールの變形で、一日聲を囁らして、何がしの日給を貰ふのでせうが、思へば罪な商賣ですね。

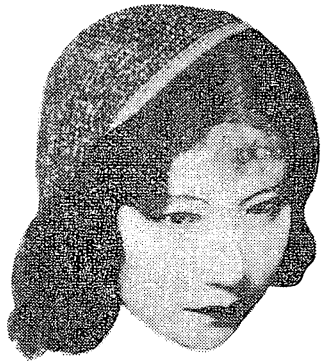
道頓堀で、これこそはと御自慢なやつて良いのは、キャバレーでせう。所が生憎私は性來あのカフェーとかキャバレーとか綺麗なお嬢さんが澤山ゐる處は苦手で、半年以上も道頓堀をうろくし乍ら、未だ一度も寄せて貰つた事がないのです。氣が弱いと云ひませうか、御婦人がこわいと云ひませうか。尤も一度夜中の道頓堀を、宜い御氣嫌でフラつき乍ら、酔ふと病の、キャバレー〇〇の植木に飛びついて、鉢を壊して、交番へ引張られて、散々怒られて辨償したと云ふ思はぬ奇禍を招

いた事はありますが。其處へゆくと、法善寺の境内に屋臺を出してゐる、ドン／＼焼きのおぼさんと遊んでゐる等は至極無事です。

「おぼさん、玉子を焼いておくれよ。どうも此方にはエビ天がないんでね。等と云ひ乍ら聞いたのですが、驚く勿

れのおぼさん、石の上にも三年所か境内の石壁で、今年で十四年ドン／＼焼きを焼いてるさうです。何でも娘さんが一人、嫁入り先から病氣で歸つて來て、今は家で寝てゐるさうです。

さて、私の達頓堀生活は。と云つても別に取立て、申上げる事はありません。生れつき變屈で、交際下手で、能なしで、かりきし無藝大食の方なのですから、強いて申し上げれば、毎日角座で晝夜二回、俗に三度の飯より好きだと云ふ芝居を演らして戴いてます。どうも下らない事許りくどくと失禮致しました。



「花咲く樹」の

エマに就いて

瀧 蓮 子

八月、J・O・トーキーで「戀の舗道」を撮り、九月は引續いて角座の新派劇で「花咲く樹」の河内エマを演らせてもらひます。原作を読んで直ぐにこのエマが好きになりました。自分としても好きな役ですから、充分研究して御期待に背かない様演つてみるつもりです。で、これについて道頓堀編輯部の方から、何かこのエマに就いて答へよとの

御命令ですので、甚だ簡單ですが、次
のとほりお答へ致します。

大した役も付かない映畫女優をあつ
さり見切つて、雑誌記者になり、どう
しても原稿を書かない作家には、書か
せるために、女として最後の手段をも
敢えて惜まない女。それでゐて、感情
のみに支配されず、常に理性を働かせ
てゐる女。機會を得て新劇女優になつ
て人氣も上るが、しかし、結局は母で
あるために、愛兒の許へ歸つて行く。

これが「花咲く樹」のエマです。

私は自分の思つてゐることを、常に
理性を働かせて、これだけのことをや
つて行けるエマが好きです。總てまで
とは行かすとも、現代の女性はエマの
する事位は、心の中でしたいと思つて
をられる筈です。云ひ換へれば、現代
の女性はエマの心持を否定することは
出来ないと思ひます。

私がこんな事を云つてゐると、私も
エマと同じ様な女だと思はれますが、
私は温順しい女ですから、どうぞ、そ
れだけは信用して下さい。

最後にエマが子供の許へ歸つて行く
所は、小説の方ではそうなつてゐませ
んが、エマの子供の所へ歸つて行く氣
持も判ります。しかし、こんな事を書
いて「瀧さん、子供あるんですか」なん
て質問を受けては大變ですから、では
此の邊で失禮致します。

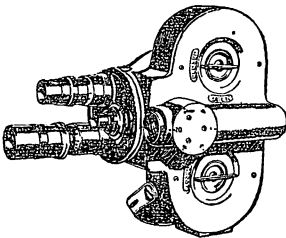
◇ 山上貞一氏「出發前」
出版記念會 ◇

山上貞一氏「出發前」出版記念會が、
来る六月十四日丸萬五階ホールに於て
催される。發起者は、新聞關係者及び
關西別項人五十餘名である。

フィルム

十六ミリ界の
最峰高

未だ會てフィルムモカメラ
で影して失敗があつたか
? 未だ會てフィルムモカメラ
で一呎のフィルムが浪費
されたか? フィルムは映
畫になると同時に最も優
秀なるカメラマンを兼ね
ボタンを押し給へ貴下
のなされる事は唯それだけ
だ



(早進ゴロタカリにあに店ラメカ流一國全)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

『東京新派』雑感

菱田正男

八月大阪で二十六日間打ちつゞけて非常な好評を博した總動員の東京新派が九月中旬から京都南座へ来る。東京新派も總動員で京へ来ることは久しぶりだ、しかも狂言が東京、大阪で大當りだつた「初すがた」と「不良少年の父」や、「葵の上」など、いゝものを揃へて演るといふのだから、好劇ファンの見のがせぬものだらう。

東京新派も更新會が出来てから基礎いよゝ堅く、全員がガツシリ組んで、それこそほんとうに水も洩らさぬ結束ぶりだ。その上相當な機關雜誌まで發行して當るべからざる鼻息、こうした結束が、いま新派を人氣の頂上にもつりあげてゐる。

最近よく關西へやつて来るが、その成績もよく、一般好劇家もよく統制のとれた、芝居のますゝ巧くなつたこの連中に感心してゐることは喜ばしいことだ、喜多村線郎、河合武雄、井上正夫の三元老から、花柳章太郎、小堀誠、英太郎、伊志井寛、柳永二郎、大矢市次郎、藤村秀夫らの幹部連、若手、大部屋の連中にいたるまで、新派を可愛いがること、藝道にまつしぐらに精進すること、全く涙ぐましいほどだ、この連中がしつかり組んで火の出るやうな芝居をしてくれるのは何といつても東京新派の他に誇るべき最大のものであり、好劇家の白熱的歓迎を浴びる所以であらう、自分らは、いつまでもこの新派が、この結束の下にいゝ芝居を見せてくれることを切望する。新派劇壇最近のニュースといへば、花柳が永年の努力を認められて四大幹部の一人に昇進したさうだ

この人にしてこの榮進はさもあるべきで、松竹でズーツと育つた俳優でこの榮進を見たのは花柳一人だし、師匠の喜多村の満足もさこそと察する、いまだに花柳の藝を賞めない喜多村、面と向つて賞めてくれぬ師匠の有難味をよく知る花柳、全く「この師匠にして、この弟子あり」劇界佳話といふべきだ。それに、こんどの「東京新派總動員關西公演」の大看板の下に一抹の淋しさはこの花柳のよき相手梅島昇の存在せぬことだ、聞くところによると大谷社長、河合武雄らの怒りに觸れて絶縁されたかの如く聞く、もし噂の如くんば好漢のため惜しむべきで伊井亡きあとの二代目たる自負心のあまりにも強いための結果の招いたものか、われらは花柳の藝にいよ／＼光りを増すを見ると共に、梅島の復讐？を望んで止まない。

「婦系圖」における主税とお薦、「瀧の白糸」の欣彌と白糸、「不如歸」の武男と浪子など、花柳、梅島のよきコンビの再現の一日も早いことを待つてゐる。



さて今度の京都の三狂言の「初すがた」は明治文壇の巨匠小杉天外氏の原作で、明治三十三年頃の芝居だといふが、ストーリーも見物によくわかるし、川村花菱氏の脚色の巧さも充分に味合える、新派脚本の最も必要條件の催涙効果百パーセントのものだけに、京都でも必ず受けると思ふ、花柳の小しゆん、小堀の文遊、伊志井の龍太郎、英の玉枝、河合のお直、それ／＼の適り役が、この芝居を一層成功させてゐる「葵のうへ」は河合、喜多村の演しもの、喜多村得意の怪奇趣味を一ぱい含んだい、中幕物「不良少年の父」は佐藤紅緑氏の原作を川口松太郎氏が脚色した所謂家庭悲劇、井上の伯爵、柳の龍彦、花柳のお鈴の達者ぞろひの力演が更に強い感銘を観客に與へること請合ひのものだけに、三篇共東京新派久方ぶりの總動員にふさはしい狂言だ、こゝでいさゝか苦言を呈しておきたいことは、今日の如く交通至便の時代には大阪で出した狂言を、よしそれが好評を博した

ものだといつても、そのまゝ京都へ持つてくることは非常に損だ、京の見物を大阪でとつて、も一度京都でとらうとはチト慾が深い、いろんな事情のため、大阪と異つた狂言を上演出来ない場合もあらうが、こうしたことは將來大いに考へてほしい。



こゝに一寸難問題がある、それは東京新派が大阪ではさうはないが京都でも一つ歓迎されぬことだ、この原因はいろく云へやう、だが結果に於いて大入満員つゞきといふ景氣のよさの見られないのは事實だ、昨年三月の南座來演當時は、恰も花見時分の最悪時で、これに祟られて相當痛手を受けたとかいふ、こうした経験を過去に持つ連中の京都行にクサるのも亦無理はない、今度にしても大阪と同じ狂言だけに、どの程度まで大入りをし占められるか、といふ不安がある、何しろ芝居といふものに、もつともむつかしい京都だけに、當らないのも強ち「俳優がわるい」とか「狂言が古臭い」とのみ云へたわけでない、京名物の一年一度の顔見世の如きは、あらゆる階級の人が「見ねば耻になる」といつた氣持で押しかけるのだから問題はないが、他の芝居ではさうした氣持にはなれない、だからこの際義理の御連中ではなく、京都の地の客に接觸することが肝心だ、芝居につきものゝ義理合ひの組見の客などは土産物一つでどうでも無理は肯いてくれやう、だが地の客はさう簡單に行かない、それには幾度も京都へ来て、ウンと馴染みをつけることも肝要で、意氣、熱、努力によつて、その目的を達成すべく大いにやることだ、そして「東京新派」のよさを京都の全般にハツキリ認識させることだ、われくは新派にこの日の來ることを期待すると同時に、京都の好劇家もこの際、東京新派にウンと花を持たせてやるべきだ、そして京の見物と、新派の連中の堅い握手、ほんとうの親睦を圖り、更に新派の連中を鞭撻してやるべきだと思ふ。

南無仙壽「力士」

花 柳 章 太 郎

板草履を履いて北國奥羽を歩いたことがある。新潟を振り出しに東山温泉、秋田、青森、青森では東京の大角力が興行されて居た。一行は英、若井、小生他にもう一人と四人……落語の三人旅以上のたわけをつくすこと数につきない。

戦争後好況時代のほとぼりさめきらない……今のやうに世の中がせちがらく赤い風が吹き荒れない時分、したがつて人間も慾が着物をきて居るからに、どこかポーとした處もあつた。淺虫の磯ばた軒低い石をおいた屋根のつゞく鄙びた景色に一目惚れして、切符の途中下車を利用して見て一行は、その寒村に降りたのである。夏であつたので、一と風呂穴のやうな湯に飛び込んで、空腹のおそ晝食、早夜食をすませた。然しまだ暮れをめしめない夏陽は、裏の海邊の波音とともにかかひのである。藻草の多い海底を見ては、泳ぐ氣にもなれないので、四人ぼんやり向ふに見える何やら云ふ島を眺めて居る。誰も泳ぐものがないと海を我物顔に泳いで居る大男がある。遠眼に見て實にいゝ體、丈は六尺以上もあらうか、四肢の發達肥りぎま立派に力士の資格がある。拔手を切つて白浪をくどり、沖から汀に向つて泳ぐ姿、夕陽を脊にして饑のやうに水にあそぶあざやかさに、しばし四人も見て居た。とつぜん英が「角力にしたいな、何て云ふいゝ體だらう……」「實際おしい素人にしておくのは暮のうちにもこうした體の角力は少ない」いろくの噂評議とりぐである。波打際にポツカリ浮んだ彼男、水を吹いて我々に言葉をかけた……「何時來たの不思議な處で逢つたネ」よく見れば、この間髪を切たばかりの年寄前横綱日下開山天下の力士「鳳谷五郎」

四人、開いた口がふさがらず……「好い體に違ひねえ……」

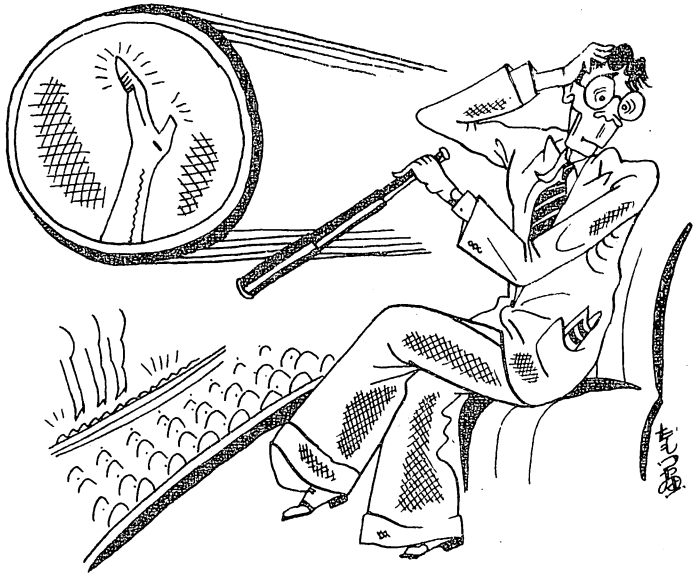
劇壇春秋

B・B・B

八月の中座に蟹の仇討が出たのは十六年振りとかで珍しいが季節違ひに遠慮して例の紅葉のあるのに雪が降るの通り文句をカットした。片輪車を輓いて花道を出てくる初花勝五郎の風情にお芝居らしい興味があるのだが。自然上野の衣裳もお定りの黒地に雪持ち松の揃ひを逃げて、夏向きの白綾子に茶金の織袴になつてしまつた。曠暑かつたてござんせう。その中で涼しさうな延若の筆助、肌襦袢に向ふ鉢巻と云ふ行き方を避けて、多見藏の型だとか云ふ素綱一枚の身軽さ。身軽さついでに二番目の助さんでは丸裸になつて愛嬌を振まく。色んな意味で延若趣味百パーセント。

錦吾成太郎鷹之助と云つた所が四日市の宿場女郎に扮して面白可笑しくふざけ散らす。中でも成太郎の珍演力演どうもたゞ事ぢやない。錦吾の御供米の老婆と共に達者な事だ。モデル詮索なんてシツレイな想像はしない。何でもいゝからその熱、その調子。

延若魁車の喜劇的手腕は既に定評があるが、福助や壽三郎のユーモアは一寸珍らしい。黄門さんを高砂家に持つて行つたのは確かにいゝ思ひつきだ。常には物堅い壽三郎の長次が伊勢女郎を相手に樽



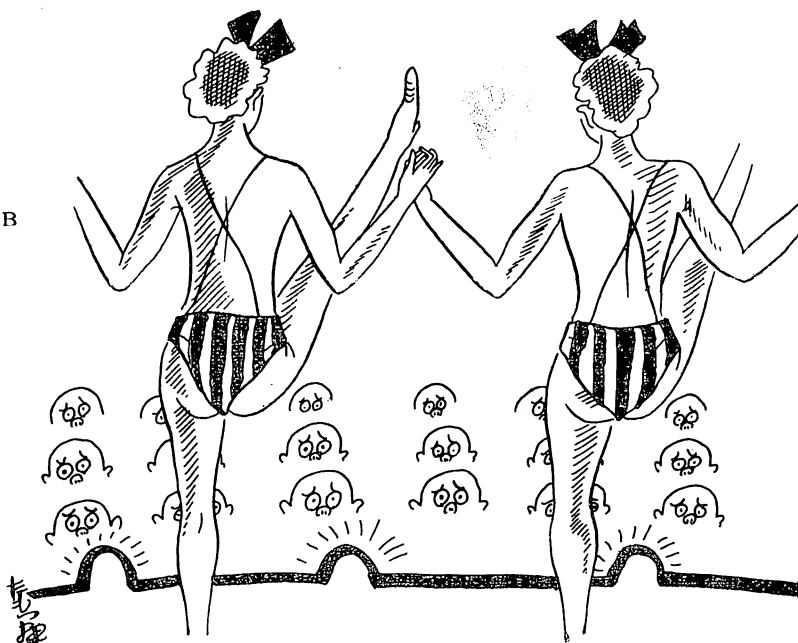
歌舞伎座異聞

大概たもつ

エロシーンや如何にとものく〜しい望遠鏡持て参観いたトタ宇宙に上つた銀の靴……ウヘーッ完全に参りましたヨ。」

「アラツチヨイト、此處へ来る日本人の眼の色、噂に聞いてたより、大違ひヨ」。(ステーチの彼女達のささやきを一寸譯し見たのです)

B



の雨の洪水、實にアメエもんですな。

新派即お涙芝居は昔からの通則であるが、こゝらで一つ喜多村を中心にした上品な喜劇を見せてくれないか。あの巧緻で當て氣のない喜多村がニコリともせず淡々と演じて行く喜劇には又別種の味があらうと思ふ。何なら春秋子が一つ提供してもよい。壽三郎や福助の喜劇を珍重する意味で、喜多村にも然るべき喜劇を待望したい。變な氣分劇なんかより大阪の見物には受ける事確かだ。

うら盆の夜の殺人と云ふ芝居、もつと何かあるだらうと思つてゐる内に幕になつてしまつた。喜多村のだし物だらうと思ふが、河合の方が餘計に芝居をしてゐて、それに綠さんあの調子で芝居氣が勘ないものだから些か飽氣なかつた加ふるに見物席の子供が何處もかしこも音無しくしてゐてくれないので、せりふなど半分はききとれない。半額の料金で入つてきて大

人より邪魔になる子供の見物は特に新派の芝居に多いやうだが、十歳以下の子供連れは入場お断りと云ふ譯には行きませんか。

不良少年の父第二場カフエーラモルトの女給お春の所へ龍彦を探しにやつてきたお鈴をみると龍彦さんはお歸りになりましたわよと云つてウンとするお春の巧まさ、この所市川紅梅嬢大出来々々々。

南座家庭劇三の替りに三十六號室と云ふのが出た。探偵劇かと思つてゐたらフアツシヨ劇だ。左翼の芝居終熄して愈々右翼劇が擡頭してきた。

レビウのファイナレはいつも階段式と定つてゐる。この定型を打破る人があつたらレビウ演出の天才だ。大劇の見物席を舞臺に舞臺を見物席に置きかへてみたら如何ですか、と。

劇場街いろは歌留多

讀 人 不 知

(い) いつまでも若い成駒家

成駒家はん、いつまでもほんまに若うまんな……………。

(ろ) ろんぐらんで割引券

堂々第五週續映續演——トタンに割引券の出動

(は) 春は唄から踊から

三月カフエーの造花と共にステージの春ひらく

(に) 俄か雨大入が増え傘が賣れ

二十五錢の番傘を買ふより劇場へ入つた方が經濟的で……………。

(ほ) ほめて劇評、くさして劇評

諸先生が御執筆あせられるものでアルです。

(へ) へたば大根、上手は神様!

その他「大統領」「X×屋」「竹に虎」などのあり。

(さ) 特、一指定券前賣開始

……團體觀劇には係員參上特に御便宜御相談申上げるとの事です

(ち) ちんごんを使ふ宣傳屋

花柳病科

性病科
皮膚科

電話戎二六三六番

藤原醫院

南區難波新地五番町

戎橋電停二ツ南辻西入

歌舞伎座南側戎橋筋西入

(れ) (た) (よ) (か) (わ) (を) (る) (ぬ) (り)

新聞廣告、マキピラ、立看板、ポスター、アドバルーン、E T C、

愀氣をしない役者の女房

…：處が愀氣をする役者の女房もあるにはあるです。

盗んてお手柄、師匠の藝術

この名優に、この弟子ありと云ふ處でせう。

類をもつて集まる大部屋

樂屋風景の一齣——

をかきにあんばん、らむれよろし

その他、支那栗、チヨコレト、イロくゝとあります。

若手俳優奨勵劇

今月の中座でして、椅子席一圓さいふ破格の觀劇料。

家庭劇かたまつて三年

浪花座に更生のスタートを切つて三年メデタイ話であるデス

世が世なればと湯呑み持ち、

——夏なれば大きな團扇で先生をあをぐ俳優修業を苦しいかな

タイアツプには押の一手

近頃の新聞廣告をとまかく御覽下さいませ…：

冷房装置で避暑氣分

さしづめ夏の大阪歌舞伎座のことでせうかれ…：…。

PEACE SYRUP

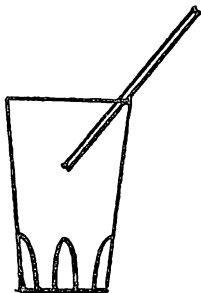


34年 サンマー スタ-

シロップ界の權威

ピースコーヒシロップ

ピースフルーツシロップ



✓ Kyoto Manju Co



大阪芝居進行私見

入江來布

口上

劇壇非常時の打開とか、轉向とか、人並みに當世風の言葉を使へば威勢がよいのであるが、元氣のよいその種の議論は兎角理想に流れて遠かに實現が望まれず假りにその理想が實現さるゝ場合は、それは私どもの考へる普通の芝居ではなくて、大抵それは「別様の演藝」として現はれてくるものである。私は、さういふ別様のものを産み出すための創作的企畫案でなくて、在來普通に世間で言ふてゐる「芝居」——「大阪の芝居」といふものを、手近に、先づ當面どうしたら見直し得るだらうかといふ、謂はゞ極めて

平凡な、あたりまへな、あたまのふるい、普通の歩み、即ち今日、松竹側に於て、やつて見やうとさへ思へば實行の出來さうな、そして當面に相當の良果を結びさうなことを、極めて平凡に二三話して見やうと思ふ、恰も、大阪若手俳優たちの「特選書間興行」といふものが現はれ、文樂の復古記念興行もあらうといふ機會でもあるから。

若手特選出しもの事

大阪の若手諸君のために、自由な腕の振へる特選興行をやつて貰つたことは先づ賛意を表する。この諸君のうちには成太郎君、政二郎君のやうな知り合ひの人

も交つてゐるし、随分奮發して、うんとやつてほしいと思ふ、けれども一つ川腎のことで、残念なのは狂言の立て方である、新進の若手、第二世の諸君が、元老や第一世が手がけの老成した狂言をそのまま自分たちの手で再現して見たいのは必ずしも無理からぬ欲望とも思ふ、またそれが修業の一つとも思ふが、併し、あまりに古典や景事ばかりに偏しては折角の「若手特選」の呼び聲にもそぐはない「稚曾我」も結構だし、「墨ぬり」も面白からうし「宮城野信夫」もよいことはよいが、さてそれ等と俱に、一つでもよから研究的的新劇を加へてほしかつた。いつも昔し語りの愚痴を言ふやうで

あるが、當年の研究座の時のやうな試演の脚本を上場して貰ひたい。適當な脚本がないと言はれるか知らぬが、勇氣を出してやる氣ならば、見せてほしい脚本は相當にある、生半ちなやうな妥協のお手盛り脚本には却つて適當なものが少く、假りにあつてもそんなのは寧ろやらない方が爲めになる、やる位ならば思ひ切つて非妥協的のものがよい、場合によつてはそれこそ先輩諸丈のやつたものを新進氣鋭、騎虎の勢ひでやるがよい、例へば「名利長年」とか、「坂崎出羽守」とか「天一坊」とか、何でもいゝから少し身のあるものを思ひ切つてやればよい、危ぶむかも知らぬが、精神一到、勇を鼓してやれば、きつと成功を信じてよい。

その點では、夜の大歌舞伎の方で、壽美藏丈と魁車丈とが「かさね」を出した事を双手をあげて讃賞する、羽左衛門と梅幸とのに對照して玩味してもよいが、

私は、そんな比較や對照などの狹量さでなく、全く始めて見る感じで見、また始めてやる感じで演出したら、きつと面白からうと思ふ、夜の部にこの勇氣がありこの勇氣あらしめながら、若手特選の方にこの勇氣あらず、あらしめなかつたのは海に残念であつた。

試演ものを一狂言づゝ 加へる事

大阪の芝居の出し物中に、必ず一つづゝ試演的のものを差加へるやうにしたらきつと、そこから何者かゞ發見顯現されるに違ひないと思ふ、演者は、獎勵のため若手諸君にやつて貰ふのもよし、必ずしも若手とばかりに限らぬ、鼎座の魁車福助、壽三郎、三丈にやつて貰ふのもよろしい、またその中間の人々で別に組んでもよろしい、成べく純藝術的のものか思ひ切つて古典的のものか、兎も角非

妥協的のものを出してほしい、脚本は、前章に言つた通り、やる氣なら別段別議へにしないで幾らでもある、却つて別議へのものよりも、少し遡つて新劇脚本勃興時代のものに澤山名作が待機してゐる、役者本位に嵌め込んだものよりも超然と書き卸されたものをやれば、きつと幾分の得る所があるものだ。若手諸君の櫻梅會とか、古典座とかいふ試演團體が、温習會のやうなところに低徊してゐるのを齒痒く思ふ、二元主義の私は、その低徊も必ずしも一概に無益だとは思はぬが、同時にその半分位づゝは勇氣を出して研究劇をやらなければ思想が轉換進歩しないだらう、研究劇をやることは決して御曹司たちの活券を傷けるものではない、それは諸君が双肩に擔ふべき「次の大坂劇壇」の重大な責務の上からも當然なすべき本業である。さう言へば、一頃の「次ぎの時代の會」はどうなつたか

もう時勢は「次の時代」に移つては居るが、空気が依然として「前の時代」に依迷してゐるのではないか。

文樂座を道頓堀へ還元的事

ほのかに聞くところでは、十月には竹本座旗揚げの二百五十年記念に、當時の道頓堀西の芝居、即ち今の浪花座に文樂座の移動出演を催して、義太夫盛時を偲ぶ古典的の表飾りも華々しく、狂言も當時吉例の評判淨瑠璃、近松門左衛門作の「世繼會我」を出すといふことである。會我兄弟の歿後、虎御前の生んだ十郎の一子に依つて會我家再興といふ新興的内容をもつ「世繼會我」は、竹本座の初興行に最適のものであつたと同様に、二百五十年後の記念興行には更に一會新しい意義をもつて復活したと言つてよい。その噂さを仄聞して、私はまた一つの私見を浮べた、それはまことに平凡な話し

だが、文樂の浪花座出開帳を、この記念興行だけ一回限りの特別出演とせず、これを機會に、本格式に全然道頓堀へ還元して來たらどうだといふことである。貞享二年の二月、義太夫が本式に櫓下の大看板を立てた當時の西の芝居の由縁に立つ今日の浪花座は、位置と云ひ、また道頓堀各座の配合の上からと云ひ、申分のない場所だと思ふ、大阪は淨瑠璃の土地ではあり、淨瑠璃好きも澤山あり、文樂の名は兒童走卒さへもよく知るといふ状態でありながら、その割には實際に見物する人は少い。それは色々理由もあるらうが、その主なる一つは小屋の位置に關係があると思はれる、近頃文樂の趣味が一層普及し、國家の保護とか、市營とかいふ話もあり、外客にも評判になつてゐる、斯ういふ氣運の折柄、文樂が道頓堀に移つて、浪花座を適當に改修してこゝで常設開演することになつたら、芝

居好きの人、淨瑠璃好きの人々は、道頓堀心齋橋を散歩する毎に心を動かされるし、地方客もその表を通つて「は、あ、これが名高い文樂か」と、その芳烈な句ひを享受するであらう、さうして屹度、今より以上の大入大繁昌を期待し得るであらう。

四つ橋の方は、映畫館にするなり、他の利用法を講じたら松竹側も都合がよいだらうし、三方四方よい結果を齎すことと思ふ、これもやらうとさへ決心したら出來ない相談ではない。

但し、文樂を、たゞ骨董的に、餘喘を保たせるだけで、自然の命終に打ちまかせるといふなら亦何をか云はんやである

成駒屋を中座へ引戻す事

大阪名物鴈沼郎文が、大劇場大阪歌舞伎座に出ることは、どちらも大きいもの同士でうづりがよい様に思ふけれど、如

何に天下の名優でも人は人だから寸法には限度がある、小屋が何千人劇場の大建築になつたからと云つて、成駒屋が遽かに三倍四倍の體格に膨脹するわけには参るまい、「暫」の鎌倉権五郎も從來の花道へ出てこそ小屋一ぱいにひろがつて見えるが、何千人劇場へ出て来ては幾ら足つぎを繼ぎ足して見たところで場を壓する感じを出すことはむづかしい、紙治の「魂ぬけてとぼく」の足元も同じ道理である、石切梶原の垂直に振りあげる名剣も、武部源藏が「虚と云はど斬付けん」意氣込みも同じ道理である。何千人を一時に容れる大ホールさへ拵えたら、名劇の大量生産が出来るといふ説の錯誤は、私たちの當初から指摘したところだつた、何千人が一時に見る舞臺上の大衆向商品は、歌劇とか、レビューとか、ダンテ魔術團とか、全く從來の「芝居」とは別なものを産み出すことにはなるが、從

來の芝居の大衆化にはならぬといふことも夙に斷言したところだ、果して歌舞伎座の成駒屋は中座の成駒屋と異つて來た東京の役者たちを持つて來ても同じことである、(東京の歌舞伎座と大阪の歌舞伎座と舞臺の幅は同じださうだが、東京のは日本型で、且つ機敷があるので餘程緩和されてゐるさうだ、その代りに座席數は少い)よしんば理想通り成駒屋の紙治を一圓均一で見得るやうに經濟化したところで、何千人劇場で見る一圓の紙治と、曾て中座で見た十圓の紙治とは全く別のものであるのを如何せんやである。

そこで私は、名優成駒屋の晩節を全からしめるために、また名優劇の舞臺を、ちつとでも永く現實にとゞめるために、成駒屋を中座に引戻すことを提唱する。レビューでなくて、日本固有の芝居といふものを演ずるには中座程度の劇場が最も格好である。

そして、これからの成駒屋は、是れ迄のやうに毎興行續いて出たり、幾狂言に顔を出したりすることは不可能であるから、特にこの名優のために日數を限定して特別名人劇を上演し、丁度、音樂の巨匠が朝日會館や公會堂で演奏會を催す時のやうに、夕方から二時間ばかり、指定券と普通券の二種位にして、手續きを簡易に見物できるやうにして、成駒屋の「紙治」に若手の研究劇一つを附けて出したら、きつと評判になるし、これまで成駒屋を見なかつた人も見に来るだらうし、大劇場に於けるよりも却つて成駒屋は大衆に親しみ得るであらう。

大劇場と名人芝居とは

別々の事

同じ大衆と云つても、三十錢の座席券で少女歌劇を見たいといふ大衆と、一圓なら成駒屋を見たいといふ大衆と、同じ

層圈のものであるか、どうか、同じあた
ま敷であるか、どうか、この點も考へず
ばなるまい、電車で走つて丁度いゝ沿線
へ、大衆を一時に運べるからといふので
何十輛連結の國際列車を運轉することが
果して合理化か、どうか即斷はできな
い、合理化はその字の通り、ものに最も
適應した扱ひ方を指す言葉であらう。

何千人大劇場を建て、ボタン一つ押
すと二重三重の廻り舞臺が自動的に廻轉
し、これに依つて奈落の底の冗員が淘汰
され、劇場經濟が合理化される、ところ
が大阪歌舞伎座はそれを試みて奈落労働
者の反感を買ひ、ボタンを急激に押した
ので急廻轉し、成駒屋からダメが出て、
以來電氣廻轉は見合せたのだとまるで見
て来たやうなことを云つた人があつた、
電氣に全く素人のやうな話したが、私は
寧ろ歌舞伎芝居の廻り舞臺には、それに
ふさはしい廻り方があると思ふ、若し成

駒屋がダメを出したのが本當ならその點
にある。まことの合理化は電氣仕掛や、
奈落労働者の社會問題などにあるのでは
なくて、舞臺の上の芝居にある、成駒屋
は、きつと心ひそかに舞臺と觀客席の不

合理なひろさにダメを抱懐してゐたに違
ひないと思ふ。
但し、時勢が進んで、何千人大劇場に
適應する成駒屋が出ないとも限らぬ、併
しそれはレビニウの變態であらう。

唯一の演劇雜誌 × × ×

「道頓堀」の年極め

御購讀をおすゝめ致します

- ● ● 一ケ年 ● 三圓三十錢 ● ● ●
- ● ● 申込みは編輯部宛 ● ● ●

クラブ白粉

あたしの歡よろこび……

あたし……
クラブ白粉とせう
つけてるの！
クラブ頬紅ほくべに
つけてるの！
クラブのルージュ
つけてるの！
さんごのやうな頬ほ
いちごのやうな唇くちびる
あたし……
クラブが大好きよ！



代時色肌



俳優系譜 (三)

其の四……嵐三右衛門

○初世嵐三右衛門 攝津尼ヶ崎の人。(一説には西宮とも云ふ)江戸に下つて丸小三右衛門と稱したるが、「傾城小夜嵐」と云へる狂言に評判を取りてより「嵐」の異名を探り、之を苗字に用ひて嵐三右衛門と改稱す。此の人顔見世の始祖にして、嵐と名乗る役者の家元なり。元禄三年十月十八日五十六歳にて歿す。

○二代目嵐三右衛門 初世の實子にて幼名門三郎。よく父の衣鉢をつぎて元禄年間の名優として知らる。元禄十四年十一月二十一日四十一歳にて歿す。

○三代目嵐三右衛門 二代目の實子にて幼名門三郎、後新平と云ふ。寶曆四年七月十日六十一歳にて歿す。

○四代目嵐三右衛門 三代目の養子にて幼名松之丞。俳名杉風。明和二年七月八日二十六歳にて歿す。

○五代目嵐三右衛門 幼名を吉田小六と云ひ享保十二年三世嵐三右衛門の門に入り嵐(小六)初世と名乗り若衆形、女形を以つて著る。明和三年五代目三右衛門を襲名し立役となる。天明五年八月二十六日七十七歳にて歿す。

○六代目嵐三右衛門 五代目の實子にて幼名岩次郎、寶曆三年父の俳名を探りて嵐繼助(初世)と云ひ専ら女形なり、永永四年元服して立役となり、二世嵐小六となる。後六代目相續す。寛政八年三月五十六歳にて歿す。

○七代目嵐三右衛門 六代目の次男にてはじめ十次郎。寛政九年叶三右衛門となり、享和元年更に珉子と改名す。また更に文政元年四世嵐小六を繼ぎ、同八年始めて七世嵐三右衛門と名乗る。文化七年江戸森田座に下り、文政九年十一月十五日四十四歳にて歿す。

○八世嵐三右衛門 七代目の門弟嵐秀太郎八世襲名。天保七年十月四十一歳にて歿す。

○九世嵐三右衛門 三代目中村十藏の門弟九世襲名。安政六年三月五十五歳にて歿す。

其の五……嵐小六

庵 魚 紙

- 初世嵐小六 五代目嵐三右衛門と同人。前項参照。
- 二代目嵐小六 六代目嵐三右衛門、初代嵐雛助と同人。前項参照。
- 三代目嵐小六 二代目小六の門人姉川菊八三代目襲名。
- 四代目嵐小六 二代目小六の實子にて幼名若次郎。文化十四年四代目嵐小六を襲名す。主として女形に活躍。
- 七代目嵐三右衛門と門人に付き、前項参照されし。

其の六……嵐 雛 助

- 初世嵐雛助 六代目嵐三右衛門と同人。前項参照。石川五右衛門、藤原時平、濡髮長五郎を得意とす。
- 二代目嵐雛助 初世の實子にして始末秀之助。のち三代目中村十藏となり、寛政九年二代目嵐雛助を相續す。同十一年江戸に下り、同十三年二月四日江戸にて二十八歳にて歿す。所作事、七變化は殊に大當をとり、石川五右衛門、春日扇を得意の藝とす。
- 三代目嵐雛助 中村十藏文化八年三代目嵐雛助襲名。文化九年江戸市村座に下り信仰記の春永久秀、五右衛門に大當りをとりたるも、文化十年九月十七日二十三歳にて歿す。
- 嵐雛助の名跡は爾後六世(明治期)まで續きたるも、著名なる俳優出ず。依つて之を略す。

註

今月は嵐家の古い系譜をお目に懸けましたが、嵐家と云ふのは、京阪の劇壇にとりましては随分と重要な家柄なのであります。それが今日の道頓堀の看板を拜見しましても、嵐家の人々は殆ど見當らない位の消沈まで、華かだつた昔を追懐してみますと、眞に感慨深いものがあるのであります。此の點現在の嵐家の方々の奮氣を促したい次第です。

▲右百科大事典、歌舞伎研究第二十七輯に據る。

◇編輯後記

村上 勝

◆爽涼の観劇シーズン——道頓堀は中座が、盆替り興行大歌舞伎で、竹田出雲二百年記念にその名作を上場、浪花座は、家庭劇が誕生三週年公演、角座は、一ヶ月振りで、關西新派が再演してゐる。歌舞伎座は、ジャズに乗つたマークラス・ショウの來演である。

◆で、先づ中座セクションには、諸先生に御執筆を願つた、尙、社友である大橋孝一郎氏が、本號に就いては、色々御配慮下さつた。共に御禮を申し上げます。

◆編輯者も「あの手、この手」と考へるのですが、どうも、二三ヶ月すると、行きづまりになる。で、讀者より本誌の讀物に就い

て、御注文願ひたいのである。編輯部は、その御注文に應じ各種各様の原稿を、耳でき、眼で見、足で蒐めて來ませう。せいぜい奇抜な御注文を願ひたいものである。

◆先月に比べ、涼しくなつたので、仕事も非常にスピーデイに運んだが、どうも發行の日が、二三日遅れて申譯のない次第です。さて本紙の表紙には、毎號、長谷川小信氏に御厄介をかけてゐる。改めて紙上で御禮を述べます。

◆六號讀物は社内的なものから、一般ものへ轉向した、來月號からは、力を注ぎ豊富にする豫定である。山川聰雨氏が、一般好劇家のためにお芝居の手引を書かれた。

◆中座晝間は若手俳優の技藝獎勵のための第二回特選興行である。愛讀者諸氏の御聲援を俟つ。

昭和九年九月一日發行

月刊「道頓堀」第九年
第九十六號

◆誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◆郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◆御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市中區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和九年八月廿八日 印刷
昭和九年九月一日 發行

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)
松竹興業株式會社大阪支店

發行者 島江 鏡也

共同編輯 山本 泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)
松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

豐 野 菜 魚 料 理

道頓堀 戎指



柴藤 食堂

二階 椅子席
三階 宴會場

電話南 四八一〇
九五四二
四八四四

昭和二年十月廿五日 第三種郵便物認可



江戸は移る

オール・トーキー

冬島泰三 監督

・下加茂秋の大作・

林 長二郎 主演

筑波雪子・磯野秋雄

特別出演

坪 井 哲・小林重四郎・南 光明

山路義人・永井柳太郎・新入社小柳すみ子 助演

江戸の最期を嘆く八百八町!! 敢然江戸ツ子の意氣を立て通して新時代に移りゆく江戸中を闊歩する快男兒相馬の金さんの愉快な生涯を物語快作